

磁石 (ή μαγνήτις λίθος) の語源について

——地名か、人名か——

橋 川 裕 之

要 旨

本稿の目的は磁石の語源を明らかにすることである。ここで言う磁石とは英語の magnet、古代ギリシャ語の ή μαγνήτις λίθος のことである。この語はいったいどこから来たのか、なぜ古代ギリシャ人はそれを ή μαγνήτις λίθος と呼んだのか。驚くべきことに磁石の語源は2千年以上も未解明であったが、視点を科学史から文学史と文献学に切り替えることが解明への重要な一歩となる。というのも、μαγνήτις λίθος なる語句の考案者は悲劇詩人のエウリピデスであった可能性が高いからである。エウリピデスの造語は彼自身の作によってではなく、その語句を引用した哲学者プラトンの対話篇『イオン』によって普及の軌道に乗った。エウリピデス自身はリュディア人クサントスの『リュディア誌』を読むことで、リュディア王ギュゲスや小アジアのギリシャ人に愛された伝説の詩人、スミュルナのマグネスの存在を知り、その常人離れした魅力および能力を、リュディア伝来の磁石に見立てたのである。

The Etymology of the Magnet (ή μαγνήτις λίθος): Toponym or Anthroponym?

HASHIKAWA, Hiroyuki

Abstract

This paper aims to elucidate the etymology of the magnet, that is, “ή μαγνήτις λίθος” in ancient Greek. Where did the word “magnet” originate? Why is an object with magnetic attraction generally called a magnet? Tracing its origins to the Latin term “*magnes*” (or “*magnes lapis*”) cannot provide a full answer, since the latter no doubt came from the Greek lexicon. Surprisingly, the question of its etymology has remained unanswered for more than two thousand years. The question that puzzles science historians has to be approached as one of literary history and philology. For it is highly likely that the acclaimed tragedian Euripides invented the phrase “μαγνήτις λίθος” for a magnetite, in a lost minor play *Oeneus*. This Euripidean phrase gained a growing popularity because of Plato’s quotation in the *Ion*, though Plato himself considered “ή Ηρακλεία λίθος” (apparently meaning a Herculean stone) more common. Thus, the question can be paraphrased as below: Why did Euripides adopt the adjective “μαγνήτις” and what did he consider in so doing? Our conclusion is rather simple: Euripides knew about and was attracted to Magnes of Smyrna—“a Greek Poet at the Court of Gyges” in the words of M. L. West’s illuminating paper—through his reading of the *Lydiaca*, written by a contemporary historian, Xanthus the Lydian.

はじめに

ニュートンの万有引力の法則とアインシュタインの相対性理論の間にある、もっとも偉大な物理学上の発見は何か。一様かつ不変の時間および空間を前提とする前者の力学上の難点をあぶり出し、相対的ないし可変的な時空間の存在を緻密な数式によって

明証した後者への地ならしをしたのは誰か。ほとんどの自然科学者はこの問いにこう答えるであろう。それはファラデーとマクスウェルによる電磁場 (Electromagnetic field) の発見とそれにともなう電磁気学 (Electromagnetism) の公式化であると。19世紀前半、M・ファラデーは実験を通じて、従来は別個に考えられていた磁気と電気が「場」に起因す

る共通の力学現象であることを明らかにし、同世紀後半、J・C・マクスウェルはその統一的な働きを後にマクスウェル方程式として整理される数式によって示した。彼らの発見が現代文明の技術的基盤を供するものであったことは言うまでもない。現代世界の多くの人々は電力や発電抜きでの生活を送ることはおろか、それを想像することさえ困難であろう⁽¹⁾。さらに20世紀に飛躍的發展を遂げた素粒子物理学において、電磁気力 (Electromagnetic force) は、弱い核力、強い核力、重力とともに、この宇宙の量子的素地を構成する力の一つであると説明されている⁽²⁾。英国の2人の天才科学者を祖とする電磁気学は、掛け値なしに、人類の生活と科学的認識を劇的に変えたのである。

本稿の狙いは、電磁気学の分野での科学的新知見を提示することではなく、アカデミアの垣根を越えて広まった Electromagnetism⁽³⁾ という専門用語に関連する、一つの語源的問いを考察し、簡明な回答を提示することである。磁気および磁力はなぜ英語で magnetism と称されるのか、磁石はなぜ英語で magnet と称されるのか。ヨーロッパ発祥学問の用

語にありがちなように、これらの語は古代のギリシャ語に由来する。その代表的な用例の一つが、 $\eta \mu\alpha\gamma\eta\tau\iota\varsigma \lambda\acute{\iota}\theta\omicron\varsigma$ (読みはヘー・マグネーティス・リトス) である。ギリシャ語で石を表す語 $\lambda\acute{\iota}\theta\omicron\varsigma$ は一般的には男性名詞として用いられるが、磁石を意味する場合の $\lambda\acute{\iota}\theta\omicron\varsigma$ は女性名詞として用いられ、そのため定冠詞 η も、形容詞 $\mu\alpha\gamma\eta\tau\iota\varsigma$ も女性形である。英語の magnet の綴りがギリシャ語のこの形容詞と似ているのは、後者がラテン語を介して英語のボキャブラリーに入ったためである。それではギリシャ語の $\mu\alpha\gamma\eta\tau\iota\varsigma$ は何を意味するのか、磁石が意味される際、なぜこの語が女性名詞の $\lambda\acute{\iota}\theta\omicron\varsigma$ に付されたのか。さらにローマ人は外来語として磁石を意味する際、ギリシャ語の複数の用例の中から、 $\mu\alpha\gamma\eta\tau\iota\varsigma$ をともなう用例を選んだのはなぜか。

磁石も磁気も現代生活の基本用語であるにもかかわらず、その語源については数々の謎が残されている。このことは、科学史の領域では語源が比較的よく知られている電気 (electricity) とは対照的な状況である。また管見のかぎり、この問題を取り上げ、種々の文献を具体的に考証した人もいない。こうし

- (1) ファラデーとマクスウェルの功績については、N・フォーブズ、B・メイホン (米沢富美子・米沢恵美訳) 『物理学を変えた二人の男：ファラデー、マクスウェル、場の発見』(岩波書店、2016年)；小山慶太『光と電磁気：ファラデーとマクスウェルが考えたこと』(講談社ブルーバックス、2016年)；E・セグレ (久保亮五・矢崎裕二訳) 『古典物理学を創った人々：ガリレオからマクスウェルまで』(みすず書房、1992年)、177-233頁を参照。
- (2) 電磁気力を含む4つの力ないし相互作用は、いわゆる「標準モデル」宇宙論の基礎とされている。詳しくは、B・シューム『標準模型』の宇宙：現代物理の金字塔を楽しむ』(日経BP、2009年)を参照。
- (3) Electromagnetism の語についても語源的考察を試みた人はいないようであるが、1820年に画期的な電気実験を行ったデンマークの科学者 H・Ch・エルステッド (1777-1851年) が最初の使用と思われる。彼は、1812年頃から電気と磁気は何らかの関連を有するとの印象を抱いていたが、羅針盤の下に置いた電線に電流を流したところ、羅針盤の針がかすかに振れるのを確認した。彼はさらに実験を重ね、電流を流した電線そのものも磁針と同様の揺れを示すことも確認した。こうして電気が磁気効果を有するとの確証を得た彼は、1820年7月21日付の報告「電流の磁針への効果についての諸実験 (Experimenta circa effectum conflictus electrici in acum magneticam)」を複数の雑誌編集部に送付した。ついで彼は9月20日付の書簡「新たな電磁気実験 (Nouvelles expériences électro-magnétiques)」をフランスの『物理雑誌 (Journal de Physique)』に発表した。エルステッドが電気と磁気の力学的関連を「électro-magnétiques」の形容詞に込めたことは明らかである。エルステッドの実験結果に大きな刺激を受けた科学者の一人がファラデーである。彼は独自の実験器具を制作し、電気の磁気効果に力学的規則性があることを見出し、1821年、その成果を2篇の論文、「電磁気の歴史的素描 (Historical Sketch of Electro-magnetism)」と「いくつかの新たな電磁気運動と磁気理論について (On Some New Electro-magnetical Motions, and the Theory of Magnetism)」にまとめ発表した。英国においてファラデー以外でこの用語を最初に使用した可能性があるのは、実験科学者 P・バーロー (1776-1862年) である。1823年に刊行された彼の著書『磁氣的引力試論 (An Essay on the Magnetic Attractions)』の副題「地球および電気の磁力の諸法則について (On the Laws of Terrestrial and Electro-magnetism)」には Electro-magnetism の語が含まれる。この書は大幅な拡張と修正をともなう第2版であるとタイトルページに記載されているが、1820年の初版はウェブソースでは見当たらず、テキストを参照できなかった。いずれにしても Electromagnetism の語はエルステッドの報告と、その意味するところを即座に理解したファラデーらの積極的使用により、1年ほどで最新科学用語として定着したことが確実である。なお電気の磁気効果については、イタリア人科学者 G・D・ロマンニージ (1761-1835年) が1802年に行った実験ですでに確認していたとの説もある。ただし、彼はその発見に特別な意義を認めず、発表もしなかったため、公式の第一発見者はエルステッドとするのが妥当であろう。電磁気学の19世紀前半の展開については、H.W. Meyer, *A History of Electricity and Magnetism* (London, 1971), pp. 46-56; G・L・ヴァーシュアー (長尾力訳) 『惑星は巨大な磁石：電磁気学の歴史』(青土社、1997年)、87-133頁を参照。

た状況は、用語の普及度や現象の重要度にかんがみれば、驚くべきことと言えよう。筆者がここで考察を試みようとするまで、なぜ誰も magnet や μαγνήτις の語の周囲に漂うもやを晴らそうとしなかったのか。考えられる理由は二つある。一つは、ギリシャ語の形容詞 μαγνήτις がマグネシアという古代ギリシャの地名に安直に結び付けられ、その関連を疑う人がほとんどいなかったこと、もう一つは、μαγνήτις の語源を解き明かすことに積極的な意味が見出されなかったことである。μαγνήτις の語源は、地域名であれ都市名であれ、有名なマグネシアなのだろう、だから何なのか。それは単に、磁石がマグネシアで最初に発見されるか、有名になるかしたことを意味するだけではないのか。かりにそれがマグネシアでないとしても、真の語源を探索することに何の意味があるのか、というわけである。

しかし、磁石の謎めいた遠隔作用に惹き付けられる児童にせよ、宇宙の組成を理論と実験によって解き明かそうとする素粒子物理学者にせよ、語源が定かではない状況を知らされれば、訝しく思うに違いない。これまで歴史学者や文献学者はなぜこの問いを放置していたのかと。彼らはおそらく、問いがマグネシアか否かの段階にとどまり、明確な回答が与えられない理由を、文献資料の読解を事とする研究者の知的怠惰に帰すであろう。筆者は本稿の議論を通じて一つの明確な回答を提示するつもりであるが、二千年以上、場合によってはソクラテスやプラトンの生きた時代以来、ずっとそれが未解明であったのは、研究者の知的怠惰のせいというよりはむしろ、この問題が研究者にとってのエアポケットのようなもの、コロンブスやブルネレスキの卵のようなものだったためと主張したい。つまり、答えそのものはごく単純でありながら、奇しくも、これまで誰も気づかなかった種の問題が、磁石ないし μαγνήτις

の語源なのである。

話を若干先取りすれば、解明のカギを握るのは、著名な悲劇詩人エウリピデスのとあるフレーズをどう理解するかという文学史的ポイントである。かつて μαγνήτις の語源に関心を寄せる学者はいたかもしれないが、その人の主たる関心が科学史にある場合、エウリピデスの作品群や周辺のテキストの読解まで手が回らなかったということは十分ありうる。たとえば、山本義隆による異色の科学史で、大変な労作でもある『磁力と重力の発見』⁽⁴⁾がそうである。この書の緻密かつ該博な論述にプラトンやギリシャのその他哲学者の話題は多く含まれていても、エウリピデスの名はプラトン対話篇からの引用において一度登場するだけである⁽⁵⁾。似たようなことはエウリピデスやプラトンの専門家にも当てはまる。彼らはプラトンがさりげなく引用するエウリピデスのフレーズに、よもや重大な科学史的謎を解く手がかりが隠されているとは思わなかったのである。近代学問の専門性の高まりにともなう研究者の棲み分け状態が長く解明を阻んできたように思われるが、筆者の考察は確実に、過去の研究の延長線上に位置するものであり、先行する学者たち（あえて一人を挙げれば、古典学者の M・L・ウェスト [1937-2015 年]）の不断の努力や偉大な業績なしには実現しなかったであろうことを明記しておきたい。

1. ギルバートの『磁石論』とその意義

ここまで一口に磁石と記してきたが、磁石という物体に対する認識は現代人とそれ以前の人との間では大きな違いがある。私たちが日常生活や学校教育の場で接する磁石のほとんどは、人工的に焼結されたフェライト磁石製品である。人工のフェライト磁石は永久磁石とも呼ばれ、原料である酸化鉄の焼結過程において、強力な磁力が付加されたものであ

(4) 山本義隆『磁力と重力の発見』（全3巻、みすず書房、2003年）。著者は大学院で素粒子物理学を専攻しながらも、大学の教職に就かなかった研究者であり、「物理学の教育のみを受けた一介の物理の教師」と自らを称している（15頁）。同書の白眉は古代ギリシャからルネサンス期までの磁石に関する種々の記述の詳細な「科学的」解説であろう。1600年の『磁石論』以前の展開に対して600頁もの紙幅を割く書は世界を見渡してもほかに存在しないであろう。最新の科学的知見を踏まえつつ、近代科学以前の科学的認識を客観的、批判的に評価する手法は、米国のベテラン宇宙物理学者でノーベル物理学賞受賞者でもある S・ワインバーグの『科学の発見』（赤根洋子訳、文藝春秋、2016年）にも通じる。この書には理論物理学者の大栗博司が「なぜ、現在の基準で過去を裁くのか」と題する解説（424-428頁）を寄せ、ワインバーグの手法が「ウィッグ史的」で不適当であるとの批判を米国で引き起こしたと伝えている。山本の記述の姿勢もまさにそれである。さらに言えば、次章で扱うギルバートの『磁石論』も徹底的批判の書である。これらの書は、科学や哲学の本質が先行する学説に対する徹底的な批判と乗り越えにあることを読み手に想起させる点で、疑いなく名著である。

(5) 山本、前掲書、30-31頁。

る。永久磁石の工法が初めて開発されたのは1916年であり、それ以前の世界で人々が手にする磁石は、天然のフェライト磁石である磁鉄鉱（マグネタイト）か、鋼の鑄造工程などで着磁された人工磁石のいずれかであった。磁鉄鉱は化学組成では四酸化三鉄（ Fe_3O_4 ）であり、製鉄の原料である鉄鉱石の一種である。ただし、磁鉄鉱の中でも磁力を帯びたもの（天然磁石）と磁力を帯びないもの（天然磁石ではない磁鉄鉱）があり、吉岡安之は「強い指極性をもつ天然磁石」の産地として、イタリアのエルバ島、オーストリア、ルーマニア、ドイツのハルツ山地等を挙げている⁽⁶⁾。このうちエルバ島を例にとれば、ラテン語でイルヴァ（Ilva）と称されたその島は大プリニウスの『博物誌』において鉄鉱石の著名な産地として言及されている。「鉄の鉱物（ferri metalla）はほぼあらゆる地で見つかるが、イタリアのイルヴァの島にさえあり、大地の鉄っぽい色により容易に識別できる」（34.41）。古代では鉄鉱石の産地として、現代では良質の天然磁石の産地としてエルバ島が言及されていることは偶然のつながりではなく、その地では太古、地中海域のプレート衝突および造山運動によって巨大な鉄鉱脈が形成され、その中に強い磁気を帯びた磁鉄鉱が含まれていたことを示す⁽⁷⁾。プリニウスをはじめ古代人は誰一人、鉄鉱石の分布範囲の広さに対して磁石の産地が限定的であることを合理的に説明できなかったが、今では鉄鉱脈の形成時の物理条件の相違（磁鉄鉱への着磁作用の有無）として説明することができる。

こうした磁気や磁石の機能についての科学的な理解はすべて磁気学や鉱物学の常識と言えるものであるが、私たちの常識を裏付ける磁気学そのものは1600年にロンドンで刊行された一冊の書物から全面展開した。それはウィリアム・ギルバート（1544-1603年）の『磁石および磁性体、そして大磁石たる地球について、数多の論拠と実験とで論証された新自然学』⁽⁸⁾なる書、通称『磁石論（*De magnete*）』である。ギルバートはロンドンで医師として生計を

立てつつ、自然研究に打ち込んだ人物であり、『磁石論』は彼の生前唯一の著書である。その主張は当時の科学水準にあってはきわめて斬新なもので、地球が自転する巨大な磁石であること、そして羅針盤の磁針および磁石の指極性は地球表面の極点を越え、地球内部の地軸の中心に向かうことを骨子とする。彼がコペルニクスの『天体回転論』（1543年）に影響を受け、その考えを受け入れたことはよく知られているが、経験重視の研究姿勢についても彼はコペルニクスにならい、種々の独創的な実験を繰り返し、そのラディカルな結論に到達した。その論述の性格は、最新の科学史の記述のそれに近いものであり、彼は磁石について書かれた過去の論考に随所で言及し、仮借のない批判を加えるとともに、誤謬、迷妄、不見識としてそれらを退けている。地球それ自体が磁石であるという科学的に真なる立場に立てば、真なる認識を共有しない過去のすべての学説は誤謬とのそしりを免れえない。ギルバートの一貫して辛辣な筆致は、カトリック圏の保守的な勢力を極力刺激すまいと念じたコペルニクスのそれとは対照的である。「我々には自由に、かつてエジプト人、ギリシャ人、ラテン人がその教説を開陳するに際して行使したのと同じ自由をもって、哲学することが許されている」（*DM*, praefatio）と彼は序で記しているが、これがコペルニクスの書の衝撃やそれへの強烈な反発を踏まえての陳述であることは言を俟たない。実際、彼は第6部でコペルニクスを「最近の人々の中で、学識の誉れにもっとも値する人（*inter recentiores, vir literaria laude dignissimus*）」（*DM*, 6.3, p. 214）と、さらに最終頁では「天文学の刷新者（*Astronomiae instaurator*）」（*DM*, 6.9, p. 240）と呼び、惜しみなくその人を讃える一方で、彼が言うところの「磁気哲学（*philosophia magnetica*）」において、コペルニクスの栄誉に値するのがギルバート自身であることを言外に仄めかしている。

磁石の語源を探ろうとする本稿において、ギルバートの『磁石論』は以下の2点で注目に値する。

- (6) 吉岡安之『マグネットワールド：磁石の歴史と文化』（日刊工業新聞社、1998年）、57頁。自然科学の素養に欠ける筆者にとって、天然磁石や人工磁石の特質についてこの書から教えられた事柄は少なくない。端的に価値ある解説書である。
- (7) エルバ島はギルバートの『磁石論』においても、磁石の産地として言及されている。Cf. *DM*, 1.2, pp. 9 and 11, and 4.5, p. 161. なお最後の箇所では、エルバ島は、磁石の産地である島が、そばを航海する船の磁針に変化を及ぼさない例として挙げられている。
- (8) 筆者が参照したのは1967年にブリュッセルで出版された初版のリプリントである。1600年の初版はウェブソースでも参照できるが、紙面の状態がより優れ、読みやすいのはリプリントである。

一つは、地球磁石説の導きの糸と思しき基本的発想、もう一つは、磁石の語源および用例についての記述である。

一つ目について、ギルバートはある時点で、地球の大地そのものに磁石と磁気の謎を解くカギが秘められていると直感した。というのも、磁石と鉄鉱石の産地は同じであるうえ、両者は（ギルバートは化学組成を知る由もないが、酸化鉄の鉱石として）共通の性質を有しているからである。彼は第1部を以下のように書き出す。

その昔、哲学は誤謬と無知のただなかにあつて粗野で未開拓のままであり、既知の事物や明快に知覚された事物の美德も長所もほとんどなかった。植物とハーブの分厚い森で地は覆われ、鉱物は隠され、岩石の知識も無視されていた。しかし多くの人の才能と労苦が人々の使用や安全に必要なある種の品々を明るみに出し、それらを他の人々に引き渡すようになるや否や（それと同時に、理性と経験がより大きな望みを付け加えた）、森と野原について、丘と山岳について、海と深海について、大地の内部について、本格的な考究が開始された。あらゆるものが考察されだした。そしてついに吉兆によって磁石が、おそらくは鉄の冶金者か鉱物の掘削者により、鉄鉱石の中で見出された。鉱物の民の手にかかるや否や、これは鉄へのあの強力かつ堅固な引力を見せつけた。それは潜在的でも曖昧でもない、誰からも容易に確認される特質であつて、大いに讃えられ推奨された。

(DM, 1.1, p. 1)

ギルバートはこれに続けて、古代の多くの哲学者や自然学者が鉄を引き寄せる磁石の力に目を留め、簡略にその意見を表明したとして、具体的に、プラトン（『イオン』）、アリストテレス（『魂について』）、テオフラストス、ディオスコリデス、プリニウス、そしてソリヌスの名を引き合いに出している。上の引用で重要なのは、ギルバートが、「磁石 (magnes lapis)」を「鉄鉱石の中で (in venis ferrariis)」見出された物質と理解している点である。そしてその発見者は彼の推測では、哲学者や自然学者ではなく、

冶金や掘削にたずさわる職人たちであつた。人類史における青銅器時代や鉄器時代の概念が学問の世界で定着したのは19世紀になってからであり、ギルバートは職人たちによる製鉄技術の活用と彼らによる磁石の発見が学者たちの観察や考察に先んじたと考えているが、これは古代の文献資料で磁石が言及されるのが比較的后代（ギリシャでは前5世紀から）であることから、妥当な推論と言える。それでは、なぜ磁石は鉄鉱石の中で見出されたのか。ギルバートの言葉を借りれば、それは「磁石と鉄鉱石は同一である」から、「磁石は起源の点でも本性の点でも鉄的であり、鉄のほうも磁石的であり、両者は種の点で同一である」(DM, 1.6, p. 39) からである。山本はギルバートのこれらの記述を「現在ではあまりにもあたりまえのため見落とされがちであるが、ギルバートの発見とみなされるべきものである。実際ここではじめて、鉄を金属にそして磁石を鉄に割り振るテオプラストス以来の分類が完全に見捨てられた⁽⁹⁾」と評価しているが、これはギルバート以前に、鉱山や冶金の現場で職人たちに経験的に知られていたことであろう。実際、彼はこの知識を自らの新発見としては扱っていないし、職人たちが磁力を帯びた磁鉄鉱もその他の鉄鉱石と同様、製鉄の原料に供していたことは明らかである⁽¹⁰⁾。彼の発見の主たる意義はあくまで、地球そのものが磁石であることを直感し、小地球（テレッラ terrella）と呼ばれる大きな球形磁石を実際の地球に見立てた実験を行うことで、自らの仮説を合理的に論証したことである。

大地が人間にとって価値を持つ品々の宝庫や産地であることは古代から知られていた。プリニウスは、金、銀、銅、鉄、その他の宝石や顔料、薬剤を求めて大地を掘り、地中に潜ろうとする行いを人間の道徳的墮落に結び付けている。むろんそれはプリニウス流の文飾の一つであつて、彼が重んじるのは地下から出土する金属類の価値、逸話、そして知識を詳細に書き連ねることである。その記述には、なぜ種々の鉱物や鉱石が大地の中で形成されるのかを考察し、解明しようとする視点はない。ギルバートは鉄鉱石と磁石が鉄の同一の原料であるという鉱物

(9) 山本、前掲書、629頁。

(10) 16世紀にはゲオルク・バウアー（通称アグリコラ）の『鉱物論』が現れるが、彼がこの書を著した背景には、ドイツ各地の採掘・製鉄の活況があつたとされる。つまりドイツの職人たちは、学者の理論的・哲学的考察の助けなしに、彼らの職務を日々実践し、生活の糧を得ていたということである。詳しくは、吉岡、前掲書、73-75頁を参照。

学の経験的知識にもとづき、それら二つがなぜ同一なのか、なぜ大地の同じ場で形成されるのかという問いへの整合的説明を編み出した点で独創的であった。そうする際、彼が大地や地球を自然界の大いなる母とみなす伝統的なメタファーを手繰ったことは明らかである。彼は読者宛ての序文で言う。「あの大きな磁石たるわれらが共通の母（地球）の高貴なる本質」（*DM*, praefatio）と。また、磁石と鉄鉱石を同一と論じる章では「これら二つの体は子宮を同じくし、同じ鉱山で誕生して育まれる双子である」（*DM*, 1.16, p. 36）と。世界各地で産出される磁石の様々な性質に触れた箇所では、「多くの地でより完全な体に近い芽が彼女の内奥から上昇し、日の光を求める」（*DM*, 1.2, p. 11）と。「子宮（matrix）」も「内奥（gremium）」も、「双子（gemellus）」も、磁石を意味する「芽（suboles）」も、「母（mater）」の語と密接に関連している。

ギルバートは鍛冶職人が熱した鉄を子午線の方向に沿って置き、その上にハンマーを振るえば磁力を帯びることを知っていたが、この現象は大地の中で本来的な磁力を何らかの自然作用によって失っていた鉄鉱石が、本来的で、母由来の磁力を取り戻す過程として彼には解釈することができた。さらに世界の様々な場所で羅針盤の針が示す偏角や伏角も、彼の地球磁石説で整合的に説明することができた。今日では羅針盤の針や地上の磁石が地磁気に反応していることは常識であるが、母や母胎をメタファーに用いたギルバートの発想はたまたま自然の実相（地球ダイナモ理論⁽¹⁾）に近いものであり、磁石と鉄鉱石の同一も、羅針の角度の相違も、過去のどの説よりもエレガントに説明することができた。

二つ目は本稿にとって一つ目よりも重要な論点かもしれない。『磁石論』を著すために相当量の文献を読み込んだに違いないギルバートは、磁石の語源と用例をどのように把握していたのか。彼はこれらの一見さまつな問題への目配りも忘れてはいない。関連する記述は第1部第2章「磁石はいかなる質のものか、またその発見について」にまとめられている。その冒頭を引用しよう。

一般にマグネスと称されるその石の名は、発見者か（群れの世話をしているときに靴の釘と杖が磁石にくっ付いたという、ニカンドロスから

の引用としてプリニウスが伝える牧人ではないにせよ）、磁石の豊富なマケドニアのマグネシア地域か、あるいは、小アジアはイオニアのマイアンドロス川沿いの町マグネシアにちなむ。それゆえ、ルクレティウスはこう述べる。

マグネテス人の祖国の境で見つかるがゆえ、始祖の名によりギリシャ人がマグネスと称するあの石は。

それはまたヘラクレイアの町か、無敵のヘラクレスにちなみ、ヘラクレスの石とも呼ばれる。その大いなる強さ、鉄において万物にまさる力や支配のゆえに。またそれは鉄的なものとしてシデリティスとも呼ばれる。（*DM*, 1.2, p. 8）

詳細な考察は後に回すけれども、これらは磁石の語源の問いへのギルバートによる要約的回答である。要約的というのは、そこにはギルバート自身の見解はほぼ含まれていないからである。ギルバートの得た情報の一部はプラトン、一部はプリニウス、一部は詩の引用もなされているルクレティウスによる。確認しておくべきは、ギリシャ語での磁石の呼称には主に3種あり、一つはマグネスなる発見者かマグネシアの地名により、もう一つは都市ヘラクレイアか英雄ヘラクレスにより、最後の sideritis はギリシャ語 σίδηρος（鉄を意味）の形容詞 σιδηρίτις によることである。ギルバートがこの問いを掘り下げず、そのままにしていることは注目に値する。というのも、それはギルバートの時代にすぐに答えの出せる問いではなかったからである。彼は根拠の乏しい判断を下す代わりに、古代文献の読書から得られた情報を平たく読者に伝えようとしている。

第2章の末尾で具体的に示されるヨーロッパ言語での磁石の呼称の紹介も私たちにとって有用である。以下、磁石に対応する原語を和訳せずに引用する。

それはテオフラストスによれば、ギリシャ人からは ἡράκλειος と、『イオン』においてプラトンに引用されているように、エウリピデスからは μαγνήτις および μάγνης と、オルフェウスからは μαγνήσσα、また鉄のような石として σιδερίτης と呼ばれている。またラテン人からは magnes や Hercules、フランス人からは adamant の訛りとして aimant、スペイン人から

(1) 吉岡、前掲書、126頁を参照。

は piedramant、イタリア人からは calamita、イギリス人からは loadstone や adamant stone、ドイツ人からは magness や siegelstein と。イギリス人、フランス人、スペイン人の間では adamant に由来する名が共通しているが、これは多分ある時期に sideritis の名が両方に共通するものと誤解されたためであろう。磁石は鉄を引き寄せその特性ゆえに σιδερίτης と、また the adamant も滑らかな鉄の輝きゆえに σιδερίτης と呼ばれる⁽¹²⁾。(DM, 1.2, p. 11)

ギルバートによれば、英語、フランス語、スペイン語で使用される adamant 系列の語は当初は the adamant (一般にはダイヤモンド) の呼称であったもので、正確には誤用である⁽¹³⁾。磁石がギリシャからイタリアへ渡ったことは呼称からも窺える。ラテン語の二つの名はいずれもギリシャ語からの外来語であり、ギルバートは磁石がローマ人やラテン人の土地でギリシャよりも先に見出された物体とはみなしていない。

ギルバートの著書の刊行から 4 世紀以上の歳月が過ぎたが、その間、自然科学の一部門としての磁気学は電気学や光学、さらには量子力学とも統合され、磁気学の教科書や解説書が書かれるたびに、彼は「刷新者」コペルニクスに匹敵する偉人として特別の地位を与えられている。しかし没後に飛躍的に高まったその名声とは裏腹に、その書を実際にひもとき、記述や図表から教えを授けようとする人は少なくなったようである。たとえば、日本では 1981 年に三田博雄によるラテン語初版からの翻訳が出版されたが、おそらく一度も再版されていない。英語

圏でも事情は似たようなものと見えて、全体の英訳は 1893 年の P・F・モッテレーの訳と 1900 年の S・P・トムソンの訳があるだけで、新たな訳は現れていない⁽¹⁴⁾。磁石の語源的考察が進まなかった理由には、『磁石論』が読み手のいない偉大な古典になったことも挙げられよう⁽¹⁵⁾。

それではギルバート以降の学者たちは磁石の語源をどのように記述してきたのか、いくつかの例を確認してみよう。1963 年の M・L・キーン『磁石と磁気』は少年少女向けの入門書と思われるが、杖と靴を地面の磁石に引き寄せられた牧人のイラストとともに以下のような記述がある。古代ギリシャの「伝説は私たちが「磁石」なる名を得たのはマグネスの名からと続きます。マグネスの杖がくっ付いた磁石のためです。おそらく真実により近いのは以下の説明でしょう。「磁石」の語は小アジアの町マグネシアに由来します。この町の近くでは磁石、より正確には磁鉄鉱のかけらが多く見つかったのです⁽¹⁶⁾。1971 年の H・W・メイヤーのより詳細な『電気と磁気』では、「磁石 (magnet) という語はテッサリアの一地域であるマグネシアから来たものと考えられている。そこで天然磁石 (loadstones) が見つかったからである。しかしプリニウスによれば、この語はある牧人の名、マグネスに由来するという。彼はイダ山で杖の末端の鉄が石のようなものに引っ付くのに気づいた。それが天然磁石だったのである⁽¹⁷⁾。ヴァーシュアアはギルバートの『磁石論』からルクレティウスを引用し、1970 年のブリタニカ百科事典の記事によりつつ、大プリニウスによる牧人マグネスの逸話を紹介している⁽¹⁸⁾。この 3

(12) この引用において、ήράκλειος は Ἡρακλεία (ギリシャ語の磁石は通常女性名詞として用いられるので、この形容詞も女性形とするのが適切) の、σιδερίτης は σιδηρίτης の誤りである。ギルバートはギリシャ語の校正にまで力を割かなかったのかもしれない。

(13) Adamant の語源については、山本、前掲書、119-122 頁を参照。

(14) William Gilbert, *On the Loadstone and Magnetic Bodies, and on the Great Magnet the Earth: A New Physiology, Demonstrated with Many Arguments and Experiments*, tr. P. Fleury Mottelay (New York, 1893); William Gilbert of Colchester, physician of London, *On the Magnet: Magnetick Bodies also, and on the Great Magnet the Earth: A New Physiology, Demonstrated by Many Arguments & Experiments*, tr. S. Ph. Thompson (Lodnon, 1900). 前者は 1952 年にブリタニカ百科事典の叢書「Great Books of the Western World」の 1 冊として再版され、後者については、1958 年に、D・J・プライスによる序と註の付された再版 (William Gilbert, *On the Magnet*, ed. D. J. Price [New York, 1958]) が刊行されている。プライスの序によれば、トムソンの訳は 1889 年に設立された「ギルバート・クラブ」の会員のために訳されたもので、250 部しか印刷されなかった。トムソンの訳はギルバートの書の組版を維持する形でなされており、プライスは訳文の質も含め、それを芸術的な仕事と評している。

(15) 吉岡もそれを「有名なわりにあまり読まれていない『名著』」(前掲書、86 頁) と表している。

(16) M.L. Keen, *The How and Why Wonder Book of Magnets and Magnetism* (New York, 1963), p. 7.

(17) Meyer, op.cit., p. 4.

(18) ヴァーシュアア、前掲書、18 頁。

名の中で、判断留保というギルバートの立場に近いのはヴァーシュアード、キーンとメイヤーはマグネスの名よりも、マグネシアの地名のほうが有力な説と暗に判断している。しかしマグネシアの町の位置については、小アジアとテッサリアのどちらを取るかで分かれている。邦語では、三田の『磁石論』翻訳への科学的解説「ギルバートの磁気哲学」において、吉田忠はこう述べている。「磁石 *magnes* や現今の英語 *magnet* はリディアのマグネシヤ地方から産出されたこと (*lithos magnetis*) に由来するともされるが、ギリシャ時代には「ヘラクレスの石」とも呼ばれていたという。これもヘラクレアという地名のせいであるという説もあるが、同時に神話で活躍する人物の怪力に倣ったからだともいわれる」¹⁹⁾。吉岡は「マグネットというのは、ギリシャあるいは小アジアのマグネシア地方に産した「マグネシアの石」に由来するといわれます」とし、ギルバートの『磁石論』から関連記述を引用している。また同じページの地図に「天然磁石が初めて発見され、マグネットの語源となったと伝えられるマグネシアの地は、マケドニアと小アジアの2か所が存在します。ただし伝説にすぎず、場所が特定されているわけではありません」²⁰⁾との説明を添えている。これらの著者の姿勢に共通するのは、ギリシャ語の磁石の語源について、誰も逸話以上の価値を認めていない点である。彼らはみな科学者か科学史家であって、言語学者でも文献学者でもないため、ある意味それは当然のことである。ラテン語の *adamant* や英語の *adamant* の由来および意味の変遷について3頁もの説明を加える山本は科学史家として明らかに異色の存在であるが、その彼もマグネットの語源については他の著者とさして変わらない。

2011年にはマグネシアおよびマグネテス人の名がテッサリアの磁鉄鉱と関連すると説く英語論文²¹⁾が発表された。これはギリシャの大学に所属する2人の鉱物学者とフランスのリヨン大学に所属する歴史学者による共同執筆の論文である。手短にその内

容を紹介すると、まず、ホメロス叙事詩から古代のマグネテス人（神話上のマグネスを祖とする部族）の当初の居住域はギリシャ中部、テッサリア地方に聳えるオッサ山周辺であったことが推測される。次いで、最近、オッサ山付近のマヴロヴニ山から高純度の磁鉄鉱の断片が採取された。大プリニウスは『博物誌』の中で、有名な磁石の産地5つの中にマケドニア地方のマグネシアを含めているが、これまでマケドニアないしテッサリアの（マグネテス人の居住地としての）マグネシアと推測される土地からは高純度の磁鉄鉱は発見されていなかった。それが発見されたという事実は、「*Μάγνητες* の呼称が鉱物 *Μαγνήτης λίθος* に由来したことの重要な証拠」²²⁾であり、結論として、「この磁鉄鉱は前8世紀のホメロスの言う、テッサリアのオッサ山周辺に暮らしたマグネテス人の由来と関係があるはずである」²³⁾。彼らの議論は、古代ギリシャでの磁石の一般的呼称の一つに *μαγνήτης λίθος* があったと想定し、その呼称にちなんでオッサ山周辺にいた一部族がマグネテス人と呼ばれるようになったと説くものである。ホメロス叙事詩は前8世紀から前7世紀にかけて成立したとするのが定説であり、彼らの論に立てば、その時代より前に天然磁石が *μαγνήτης λίθος* と呼ばれていなければ、辻褃が合わない。しかしギリシャ語文献の中でその用例が最初に現れるのは前5世紀の後半、ホメロス叙事詩よりも2世紀以上後である。マヴロヴニ山で発見された高純度の磁鉄鉱は、かつて同地の磁石が近隣の一部族に名を与えた証拠ではなく、マグネシアを磁石の産地に挙げたプリニウスやルクレティウスらの古代証言の鉱物学的裏付けとして、素直に解釈されるべきであろう。彼らの説は目新しくはあっても、ギリシャ語の磁石の語源を説明するものではないうえ、マグネシアやマグネテス人の語源への説明としても論拠が欠けている。ただし、彼らがマグネシア、マグネテス人、そして鉱物である磁石の関連を問い直したことは評価に値する。というのも、古代ギリシャ人が磁石に与

19) 『ギルバート』（科学の名著7、朝日出版社、1981年）、6頁。

20) 吉岡、前掲書、17頁。

21) V. Melfos, B. Helly and P. Voudouris, “The ancient Greek names ‘Magnesia’ and ‘Magnetes’ and their origin from the magnetite occurrences at the Mavrovouni mountain of Thessaly, central Greece: A mineralogical-geochemical approach”, *Archaeological and Anthropological Sciences* 3 (2011), pp. 165-172.

22) *Ibid.*, p. 167.

23) *Ibid.*, p. 172.

えた呼び名について、誰もギルバートより先へ進もうとしなかったからである。

2. 古代ギリシャ人と磁石

古代ギリシャ人は磁石をどのように見出したのか、そしてそれにどのような名を与えたのか。ギルバートの『磁石論』を参考にすれば、これらの問いは古代ギリシャ世界における鉄の問題に通じる。というのも、磁石と鉄鉱石は製鉄の素材としては同一であって、磁石を鉄に変えることも、鉄鉱石を磁石に変えることも冶金学的に可能だからである。それではギリシャ人はいつから鉄鉱石を採掘し、製鉄を営むようになったのか。ここでもギルバートの記述を参照してみよう。第1部の第8章「鉄はいかなる国々と地域に由来するのか」にはこうある。

鉄の鉱山は大地のいたるところに存在する。最古の著述家によって記録された大昔のものも、新しいものも最近のものも同様に。最初の主要な鉱山はアジアにあったと私には思われる。というのも、鉄が豊富に産出するかの地では、帝国も芸術も大いに栄え、人々の必要とするものが発明され、追求されたからである。…最古の鉱山は金、銀、銅、鉛ではなく、鉄のそれであった。というのも、それが一番に需要を満たすからであり、またあらゆる地域と土壌ですぐに見つかり、地表近くにあり、難なく掘り出せたからである。(DM, 1.8, p. 25)

ギルバートの指摘は部分的に正しい。とくにより古い時代ではアジアやオリエントで諸文明が栄え、製鉄も活発に行われていたというのは事実である。しかし、鉄中心主義とも呼べるような彼の見解は今日の考古学の基本的認識とは相容れない。人類が生存の補助のために用いた道具は、石器、青銅器、鉄器と、制作難易度の低いものからより高いものへと、段階的に発展したことが確認されているため

ある。たとえばエジプトでは、巨大なピラミッドが相次いで建設された古王国時代にはすでに銅器が普及していたことが知られている。銅製の鑿の活用なしに、大量の石材を石切り場から調達することは不可能に近い²⁴。錫が稀少な鉱物であったため普及には一定の時間がかかったが、古王国時代より後には青銅器が普及した。一方、エジプトで鉄器が普及し始めたのは新王国時代より後とされている。たしかに鉄鉱石の分布は、青銅の原料たる銅と錫に比して、広範に及ぶものであったが、エジプト人が製鉄の技法に習熟するまで、初期王朝の成立から2000年以上かかっている²⁵。ギルバートの推測とは異なり、過去の人々は鉄鉱石が用意に手に入るからといって、即座に鉄器を手にしえたわけではないのである。ギルバートの誤解は、彼の時代には鉄鉱石の熔解に必要とされる約1200度を比較的容易に実現できたことによると思われる（おそらく純鉄の熔解に必要な約1540度も）。金と銀はともに1000度前後、銅は1100度弱、錫は230度強で融解する。つまり、古代の人々は1100度近い温度を炉で作りに出せば、金、銀、銅、錫を熔融し、様々な物品に加工することができた。とくに青銅は鑄型を用いての成型が容易であるため、その工法は各地で導入され、人々の生活に欠かせなくなった。

今日の考古学では、ギリシャを含め、東地中海地域での青銅器時代から鉄器時代への移行期は前1200年頃に置かれるのが一般的であるが、この技術的移行の背後で何が進行していたのかは今もよくわかっていない。かつては、鉄技術を独占していたヒッタイト王国が、「海の民」の攻撃によって崩壊し、それによって鉄器および製鉄が広範に普及したと考えられていたが、この説は考古証拠の不足により支持されなくなっている。前13世紀からヒッタイトとその周辺地域で、ほぼ同時に鉄技術が普及し始めたというのが現在の有力な説である²⁶。

24) ピラミッド建造の技術的・道具的側面については、Z. Hawass and M. Lehner, *The Definitive History of Giza and the Pyramids* (Chicago, 2017), pp. 403-419 を参照。

25) エジプトでの銅の鑄造は前4000年頃のバダリ文化ですでに始まっていたとされる。詳しくは、馬場匡浩『古代エジプトを学ぶ：通史と10のテーマから』(六一書房、2017年)、41-58頁；K.A. Bard ed., *Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt* (London/New York, 1999), pp. 522-527 (s.v. "Metallurgy"; J. Muhly) を参照。J・ムーリーによれば、エジプトでの製鉄が考古証拠を通して明確に確認されるのは前700年頃であるという。

26) このテーマに関して代表的な研究は、J.C. Waldbaum, *From Bronze to Iron: The Transition from the Bronze Age to the Iron Age in the Eastern Mediterranean* (Göteborg, 1978)。「海の民」と後期青銅器文明の崩壊をめぐる諸問題については、E・H・クライン(安原和見訳)『B.C.1177：古代グローバル文明の崩壊』(筑摩書房、2018年)、および、同書への筆者の解説「青銅器時代の終焉と『海の民。』(275-280頁)を参照。

ギリシャの場合、青銅器時代から鉄器時代への移行にミケーネ文明の崩壊やいわゆる暗黒時代の問題がからむため、鉄に関する状態を正確に把握することはより難しい。それでも多くの学者が支持するのは、ギリシャでの鉄技術は前9世紀から前8世紀にかけて、東方の諸民族や諸国家との交流を通じて導入され、ゆるやかに普及したという考えである。前8世紀の由来と考えられているギリシャ語のアルファベットはフェニキア文字が改変されたものであり、フェニキア人が文字や商品のほか鉄技術を伝えた可能性もあるが、キプロス島のギリシャ人あるいは小アジアのヒッタイトの後継勢力がそうした可能性もある²⁷⁾。

少なくとも、名の知られるギリシャ最古の吟遊詩人の一人、ヘシオドスの時代までに鉄はギリシャ人にとって周知の金属となっていた。彼は前700年頃に『神統記』と『仕事と日』という2篇の叙事詩を歌い、自ら紙に書き留めたと思われる（口述筆記の可能性もあるが、彼かその周辺の誰かが初期のアルファベットで紙媒体に書いたのは確実である）。金属について見逃せないのは、『仕事と日』の第106行から語られる「5時代の説話」²⁸⁾である。これは、ヘシオドス自身の生きる時代がいかに悲惨であるかを示すために、太古から現在まで5つの種族が現れ、そのうち4つが消えたという物語である。最初の黄金（χρυσός）の種族がもっとも幸福な種族として位置付けられ、ヘシオドスと彼の時代の人々が属するのは5番目の鉄（σίδηρος）の種族である。その間に来るのは順に、銀（ἀργύρεος）、青銅（χάλκειος）、そして英雄（ἥρωας）の種族である²⁹⁾。この説話が興味深いのは、ヘシオドスがギリシャ世界における青銅器時代から鉄器時代への移行的事態を把握していたと思われる点である。彼によれば、

英雄の種族はかたや海のかなたのトロイアを目指して果て、かたやテバイの王権をめぐって争い果てた。青銅の種族と鉄の種族の間に英雄の種族を配する説明は、前1200年頃にギリシャ本土の諸宮殿やトロイアの城砦が相次いで破壊され、その後、ギリシャで鉄技術がゆるやかに普及したことを示す考古証拠と合致しているとも取れる。用語についても、ヘシオドスが4つの金属に当てている単語はどれも、ホメロスの叙事詩でも同じ意味で用いられていることから、金属もそのギリシャ語の名称も、詩人たちには馴染みのものであったことが窺える。たとえば、鉄について『オデュッセイア』には以下の詩行がある。「それはあたかも鍛冶屋が大斧かまたは手斧を、硬さを増すために凄まじい音を立てて冷水に浸す時のよう——鉄（σίδηρου）はこうして硬く鍛えられるのだが——あたかもキュクロプスの眼は、オリーブの丸太のまわりでシュッシュッと音を立てた」³⁰⁾（9.391-394）。この描写は明らかに、熱した鉄を冷水に浸すことで強度を高めるための、焼き入れ（quenching）の工程を指すものである。詩人は、鍛冶屋が鉄鉱石を炉で熔融し、鍛錬と焼き入れの工程を繰り返し、鋼を鑄造することを知っていた。興味深いのは鍛冶屋を意味する語、ἀνήρ χαλκεύςである。これは直訳すれば、「銅の男」あるいは「青銅の男」となる。かつては銅や青銅を主として扱っていたギリシャの鍛冶職人らが、やがて新たな知識と技術を得て、鉄や鋼を鑄造するようになったことをこの用語は示唆する³¹⁾。金属利用の歴史については、16世紀のギルバートよりもヘシオドスやホメロスのほうが信用に値する。ポリス成立期のギリシャ人に鉄がどのような変化や革新をもたらしたかとの問いも重要ではあるけれども、本論とは別のテーマである。

27) この分野の古典的研究は、A.M. Snodgrass, *The Dark Age of Greece: An Archaeological Survey of the Eleventh to the Eighth Centuries BC* (Edinburgh, 1971), pp. 213-295 である。近年の研究状況については、A.M. Snodgrass, “The coming of the Iron Age in Greece: Europe’s earliest Bronze/Iron transition”, in: idem, *Archaeology and the Emergence of Greece* (New York, 2006), pp. 126-143; O. Dickinson, *The Aegean from Bronze Age to Iron Age: Continuity and Change between the Twelfth and Eighth Centuries BC* (London/New York, 2006), pp. 146-150 を参照。

28) 詳しくは、Hesiod, *Works and Days*, ed. M.L. West (Oxford/New York, 1978), pp. 172-177; R.D. Woodard, “Hesiod and Greek Myth”, in: idem ed., *The Cambridge Companion to Greek Mythology* (New York, 2007), pp. 83-165 を参照。ヘシオドス（中務哲郎訳）『全作品』（京都大学学術出版会、2013年）の中務による解説（482-485頁）も有用。

29) 金、銀、青銅（もしくは銅）、鉄の金属を表すのにヘシオドスが用いているのはどれも形容詞である。それぞれの名詞は、χρυσός、ἀργυρος、χαλκός、σίδηρος である。語源的に印欧語由来であるのが明確なのは ἀργυρος のみで、χρυσός はセム語の外来語、χαλκός と σίδηρος の由来ははっきりしないという。詳しくは、R. Beekes, *The Etymological Dictionary of Greek*, 2 vols. (Leiden, 2016) の当該項目を参照。

30) ホメロス（松平千秋訳）『オデュッセイア』（上巻、岩波文庫、1994年）、236頁。

ギリシャ人が外界からの刺激によりつつ鉄器時代へ移行すれば、磁石とその遠隔作用に気づくのはいわば時間の問題であった。ギルバートであれば、磁石は鉄鉱石とともに、ギリシャではなく、アジアで最初に発見されたと断言するであろう。理論的には、ギリシャ人よりも先にアジアで製鉄を始めた民族、ヒッタイトの鉱夫や鍛冶職人らが前13世紀頃に磁石を発見していた可能性が高い。しかし話をギリシャに限定すれば、磁石が職人以外の輪で認知されるようになったのは比較的后代かもしれない。理解を難しくするのはここでも記述資料の不足であり、ヘシオドスとホメロスの叙事詩より前に書かれたことが確実なテキストは断片的な碑文しか確認されていない。ギリシャ人は約4世紀にわたって無文字社会に暮らし、ようやく前8世紀になって文字を再使用し始めたところであった。ヘシオドスとホメロスが磁石を知っていた可能性もなくはないが、少なくとも彼らの現存テキストには磁石への言及はない。

ギリシャでの磁石の第一発見者は誰かという問題は今後も解明不能である可能性が高いが、この問いを、史上初めて磁石に注目した哲学者は誰かという問いに代えると、かなり確度の高い答えが得られる。それはミレトスの人タレス、前6世紀前半に自然の探究を開始し、イオニア自然哲学の祖とされる人物である。彼が磁石に注目し、それが発揮する不可視の働きについて合理的な説明を与えようとしたことはまず間違いない。後3世紀頃の著述家ディオゲネス・ラエルティオスは『哲学者列伝』においてタレスを取り上げ、「アリストテレスとヒッピアスが言うには、彼〔タレス〕は無生物にも魂の役割を認め、磁石と琥珀を証拠に挙げた」と述べている³¹⁾。これはディオゲネスによる、アリストテレスと前5世紀に活躍したソフィストのヒッピアスの著作にも

とづく要約的説明である。アリストテレスの著書は『魂について』と推測される一方、ヒッピアスの情報源は明らかではない。おそらく彼の散逸した著作によるのであろう。ディオゲネスの引用において、磁石は「τῆς λίθου τῆς μαγνήτιδος」と、琥珀は「τοῦ ἠλέκτρου」と属格で示されているが、それぞれ主格に戻せば「ἡ λίθος ἡ μαγνήτις」、「τὸ ἠλεκτρον」となる。

この引用だけを見れば、タレスはソクラテスよりも2世紀前に、イオニア地方のミレトスにあって自然を観察しつつ、磁石と琥珀が離れた物体に及ぼす力を、つまりおぼろげながらも磁気と(静)電気を認識していたということになり、認識の面でも用語の面でも、ヨーロッパ科学がタレス以来強固で一貫した伝統を育んできたということになる。しかし事情はそこまで単純ではない。というのも、磁石についてはディオゲネスによるアリストテレスの引用は不正確であり、琥珀については、近代的な電気概念はギリシャの哲学者の考察ではなく、ギルバートの『磁石論』の簡潔な定義に発するからである。それは、ギルバート自身による用語解説の3つ目、「電気、琥珀と同じ原理で引き付けるもの (Electrica, quae attrahunt eadem ratione ut electrum)」(DM, index)である。ギルバートはタレス以来のギリシャ科学の伝統にならう形で、磁気現象と、琥珀が藁や髪の毛などの離れた物体を引き寄せる現象を別個の原理によるものと把握し、磁気との明確な区別のために、琥珀を意味するラテン語 *electrum* から新たな用語、*electricum* (複数主格 *electrica*) を造ったのである。さらに彼は磁力との同様の区別のために、*vis electrica* という用語も造った。琥珀が離れた物質を引き付け、自らに付着させるのは、琥珀と物質の間に *electricum* ないし *electrica* (電氣的な何か) が介在し、*vis electrica* (電気力) を発揮するからと

31) Χαλκεύς の語は『イリアス』の第12歌(295行)にも現れる。「サルペドンはずぐさま、青銅(χαλκείην)を打ち延ばして仕上げた見事な丸楯を身の前に構えたが、この楯は鍛冶(χαλκεύς)が打ち、内側には幾枚もの牛皮を黄金の針金を用いて、縁にぐるりと縫いつけたもの」(松平千秋訳『イリアス』上巻、岩波文庫、1992年、384頁)。「イリアス」においても、鍛冶屋と青銅(ないし銅)との意味論的連関は明らかである。『イリアス』の第18歌には、工作の神ヘファイストスが女神テティスの依頼を受け、アキレウスのための武具を鍛造する有名な場面がある。青銅製の館の鍛冶場でヘファイストスが原料に用いているのは、銅(χαλκόν)、錫(κασσίτερον)、金(χρυσόν)、銀(ἄργυρον)であり(474-475行)、鉄は含まれていない。『イリアス』の詩人もヘシオドスと同様、鉄を人間の新たな産物と認識しており、ヘファイストスの工作の場面にそれを含めることを意識的に控えたのかもしれない。なお χαλκεύς の語はクノッソス、ミケーネ、ピュロス等で出土した線文字Bの粘土板文書でも多く確認されている。詳しくは、Y. Duhoux and A.M. Davies eds., *A Companion to Linear B: Mycenaean Greek Texts and Their World*, vol. 1 (Louvain-la-Neuve, 2008), pp. 142-143 and 168 を参照。

32) *FGH*ist, A1.24.

というのが彼の推論である。究極的には磁気と同一の物理法則にもとづく現象とはいえ、ギルバートによる電気と電気力の定義はその後の電気学的发展を支える礎石となった³³。英語の electricity がギルバートの造語 electricum の訳であることは言うまでもない。ギルバートは琥珀についても諸言語の名称を列挙しており、琥珀を意味する別のラテン語 succinum も挙げている³⁴。それでも彼が最初に言及するのは古代ギリシャ人の与えた名称 ἡλεκτρον³⁵であり、彼らの思索の継承者にして刷新者たろうと欲して、この語を造語の種に選んだものと思われる。

このように語源がすでに明らかである電気に対し、磁石や磁力のほうは古代ギリシャ人の間でも一様の用語法を欠いていた。その一つの証拠が先のディオゲネスからの引用である。彼の情報源と思しきアリストテレスの『魂について』ではこう述べられている。「彼について人々が記録することに照らせば、タレスは運動的なものの背後に魂があると考えていたようだ。というのも彼は、鉄を動かすがゆえに女石は魂を持つと言ったからである」(405A19-21)³⁶。ここで性別がわかるようあえて「女石」と訳した語は τὴν λίθον であり、主格に戻すと ἡ λίθος、形容詞はなく、通常は男性名詞である λίθος の女性形である。この語の意味が通常の石ではなく、磁石であることは、「鉄を動かす (τὸν σίδηρον κίνει)」と言及されていることから明白である。磁石の遠隔作用を、生物を生物たらしめる魂との関連で把握している点でも、ディオゲネスがアリストテレスの記述を踏まえていることがわかる。

二つのテキストの目立つ違いは、アリストテレスが形容詞なしで用いている ἡ λίθος の後に、ディオゲネスが定冠詞付きの形容詞 ἡ μαγνήτις を付加していることである。リデルとスコットの定評ある希英辞典³⁷の「λίθος」の項にも女性名詞の用例が含まれており、女性名詞としての λίθος が磁石を含む貴石を意味することが示されている³⁸。そのため、アリストテレスのテキストにおいて形容詞をとまわらない ἡ λίθος に対し、ディオゲネスが自らのテキストでは磁石の意味を明確化するために ἡ μαγνήτις を付加したと考えられる。タレス自身が磁石をどのように呼んだのかは不明であるが、アリストテレスのテキストにあるような、形容詞をとまわらない女性名詞として表すことで、石との差異化を図っていた可能性が高い。ちなみにタレスの時代よりも前に成立したことが確実なホメロスの叙事詩には女性名詞の λίθος が2箇所に見れるが、いずれも磁石ではなく、特殊な石を意味する用例である³⁹。この時代は男性名詞 λίθος を女性化する以外に、磁石を表すための画一的用法のなかったことがアリストテレスとディオゲネスの表記の相違から窺える。

女性形の形容詞 μαγνήτις をともなう磁石の用例をギリシャ世界に広めたのは、エウリピデスおよびプラトンである。むしろ彼らはそれを広めようとする意図を持っていたわけではなく、この2人の用例にならうギリシャ人がその後徐々に増えたというのが実相である。ソクラテスとほぼ同年代の悲劇詩人で、アテナイで多くの悲劇を上演したエウリピデスは『オイネウス』⁴⁰なる作品で μαγνήτις λίθος の語

33) 山本、前掲書、619-620頁。

34) ギルバートは「液汁のようなものとして succinum とも (Succinum quasi succum)」と記している (DM, 2.2, p. 47)。ラテン語のこの名称は、琥珀は化石化した天然樹脂であるという科学的な知見と合致する。琥珀を意味する一般的な英単語 amber はこの綴りでは示されていない。ギルバートは綴りの近い ambra を挙げ、インドやエチオピアの琥珀を指すのに一部の人がそう呼ぶとしている。琥珀を意味するアラビア語 anbar が中世ラテン語で ambra と表記され、英語の ambre および amber の表記につながったと考えられている。したがって、amber は中世のアラビア語に由来する外来語である。琥珀の語源について、プリニウスは『博物誌』37.11において長広舌を振るい、誤謬の発信者としてソフォクレスを強く攻撃している。なぜプリニウスはソフォクレスを非難する必要があったのか、その真意は何なのか、文学史的あるいは思想史的問いとして考察に値するかもしれない。

35) DM, 2.2, p. 47にある表記は、一般的表記とアクセントの位置が異なる。

36) FGrHist, A22.

37) 筆者が参照したのは、LSJ 第9版の1996年のリプリントである。

38) LSJ, p. 1049.

39) 『イリアス』12.287 および『オデュッセイア』19.494。前者では戦闘で放たれる石が雪になぞらえられ、後者では硬い石と鉄が続けて言及されている。ともに通常の石とは異なるというニュアンスにより、女性名詞として表現されているものと思われる。LSJ, s.v. “λίθος”, p. 1049 も参照。

40) 『オイネウス』の概要と現存する断片については、Euripides, *Fragments, Oedipus-Chrysis, Other Fragments*, ed. Ch. Collard and M. Cropp (Euripides VIII, LCL 506, Cambridge, Mass./London, 2008), pp. 28-39 を参照。

を用いたらしい。らしいというのは、『オイネウス』は散逸した作品であり、用法や文脈の詳細を確認することができないからである。かろうじてこの語と『オイネウス』の関連を私たちに教えてくれるのは、9世紀後半のコンスタンティノーブル総主教フォティオスが個人で編纂した辞書⁽⁴¹⁾と10世紀末にコンスタンティノーブルで編纂された百科全書辞書『スーダ』⁽⁴²⁾である。フォティオスは「Ἡρακλεία λίθος」の項で Ἡρακλεία λίθος と μαγνήτις λίθος を区別する説に言及したうえで、「エウリピデスの『オイネウス』には、〔彼は〕諸見解を見やると、μαγνήτις λίθος のようにその考えを引き寄せ、次いで放棄する」と記している⁽⁴³⁾。項目の記事からは、フォティオスが Ἡρακλεία λίθος を、鉄を引き寄せる (ἐπισπασμένη τὸν σίδηρον) 磁石に対応する語句とみなす一方、μαγνήτις λίθος を磁石とは性質の異なる、銀に似た (ὁμοία...ἀργύρω) 鉱物とみなしていたことがわかる。『オイネウス』からの引用も、エウリピデスの μαγνήτις λίθος の用例が磁石ではなく、銀に似た鉱物を意味することの傍証として挙げられている。しかし、エウリピデスが現在時制で用いている動詞 ἔλκω と μεθίστημι はそれぞれ、引き付けることと放棄することを意味し、前近代でこれらの意味を同時に満たす天然物は磁石のほかにはない(詳細は省くが、これはアリストテレスの弟子テオフラストスの『石について』に発する誤謬である)。一方、項目と記述の量から判断して皇帝主導の文化事業であったことが強く推測される『スーダ』にも、「Ἡρακλεία λίθος」の項目がある⁽⁴⁴⁾。その内容はフォティオスの辞書の同項目の再録とそれへの短い補足である。匿名の編者は見出し語に続けて、「鉄を引き付ける ή μαγνήτις」と記し、7世紀の詩人ピンディアのゲオルギオスの一文を引用している。フォティオスの記事はこの後に来る。ゲオルギオスの文は、μαγνήτις λίθος および Ἡρακλεία λίθος の引力を万人に対する魅力になぞらえる趣旨であり、編者がフォティオスの不正確な記事の訂正を意図したことは明らかである。

フォティオスの個人的見解はさておき、彼がこの

記事を書く際に、(彼の時代には参照可能な作品であった) エウリピデスの『オイネウス』とプラトンの『イオン』を念頭に置いていたことは間違いない。『イオン』はプラトンの膨大な作品群の中で、μαγνήτις の形容詞が唯一登場するテキストである。その唯一のテキストの唯一の用例を確認しておこう。

私が今述べたように、ホメロスについて巧みに話すことは、君に内在する技ではなく、神的な力によるのだ。エウリピデスは μαγνήτιν と呼んだけれども、多くの人々は Ἡρακλείαν という女石に見られるように、これが君を動かすのだ。すなわち、この女石なるものは鉄の指輪を導くのみならず、指輪に対して力を授けもする。するとこの指輪は女石と同様の力を発揮し、別の指輪を導くことができる。こうして鉄の指輪の非常に長い連鎖が別の連鎖から出来上がる。この力はひとえにあの女石から発している。そしてムーサも神がかった人々を自ら生み出し、この神がかった人々を通じて、別の忘我の人々の連鎖を吊り下げるのだ。というのも、叙事詩の優れた作り手たちも技からではなく、神がかり的な忘我の境地において、あの美しいすべての詩行を語るのだから。抒情詩人にも同じことが言える。(533DE)

『イオン』は「イリアスについて」という副題とともに今日に伝わる小篇であり、エフェソス出身の朗誦者(アオイドス)のイオンとソクラテスの間で問答が展開される。副題はいささか不正確であり、2人の話はホメロス叙事詩の朗誦および語りをイオンが巧みに行えるのはなぜかという問いをめぐって展開し、ソクラテスはイオンの卓越した技芸を可能ならしめているものは「技(τέχνη)」ではなく、「神的な力(θεία δύναμις)」であることを彼に納得させる。ホメロス叙事詩はなぜ偉大なのか、イオンのようなホメロス朗誦者のパフォーマンスが聞き手の胸を打つのはなぜか。いわば芸術の価値や本質をめぐる問いに対し、ソクラテス(もしくはプラトン)が説得的な答えを与えようとして用いたのが、磁石と磁化のメタファーである。ホメロス叙事詩の場

(41) Photii Patriarchae *Lexicon*, ed. Ch. Theodoridis, 2 vols. (Berlin/New York, 1982-1998).

(42) *Suidae Lexicon*, ed. A. Adler, 5 vols. (Leipzig, 1928-1938).

(43) Photii *Lexicon*, η 224 (vol. 1, p. 273): ὡς Εὐριπίδης Οἰνεῖ, τὰς βροτῶν γνώμας σκοπῶν ὥστε Μαγνήτις λίθος τὴν δόξαν ἔλκει καὶ μεθίστησιν πάλιν. 『オイネウス』からのこの引用はエウリピデスの断片 567 に該当する。

(44) *Suidae Lexicon*, η 459 (vol. 2, p. 581).

合、歌芸の女神であるムーサが強力な磁石のようにホメロスを引き寄せ、次いで彼が破格の作品を通じて、イオンのような後代の朗誦者を引き寄せるといふ、磁化的構図がプラトンによって想定されている。優れた芸術作品における創意や知的鍛錬の役割を低く見積もるかのようなプラトンの議論を今日真に受ける人は少ないかもしれない。とくに磁気や磁気誘動のメカニズムが科学的に解明されている現代にあって、磁石のメタファーはプラトンの時代ほど強力な修辭的効果を持ちえないであろう。それでも偉大な芸術作品や天才的な芸術家を神や神秘と関連させる非科学的言説は今もありふれているし、磁石のメタファーとしての力にも同じことが言えるかもしれない。

筆者が上の引用について注目したいのは磁石の哲学的含意ではなく、あくまでその用法である。一方に「エウリピデスは μαγνήτιν と呼んだ」、他方に「多くの人 は Ἡρακλείαν と」。この二つのフレーズが示すことは、エウリピデスはかつて磁石を μαγνήτις λίθος と呼び（時制はアオリスト）、他の「多くの人 (οἱ πολλοί)」は ἡ Ἡρακλεία λίθος と呼んでいた（動詞は省略されているが、おそらく現在時制）ということである。フォティオスの記述に照らせば、エウリピデスについてプラトンが参照したのは『オイネウス』であり、「多くの人」との対比により、ἡ λίθος に μαγνήτις の形容詞を当てたのはエウリピデスその人であったと判断できる。つまり、磁石ないしマグネットのギリシャ的語源の一つは、エウリピデスの『オイネウス』の断片中にかろうじて確認される用例なのである。しかし、これだけでは語源の問いを解き明かしたことになる。なぜなら、μαγνήτις が何を意味する形容詞なのか、はっきりしないからである。近代において定着したかに見える「マグネシアの (Magnesian)」という意味はかならずしも正確ではない。というのも、「マグネシアの」という意味にもっとも適合す

るのは Μαγνησία (アッティカ方言) や Μαγνησίη (イオニア方言) だからである。

いくつかの訳例を確認してみよう。ロウブ版『イオン』の訳者である W・ラムは「エウリピデスがマグネットと名づけた」としたうえで、「マグネット (a magnet)」に註を振り、「おそらくカリアのマグネシアを指す」と記している⁽⁴⁵⁾。プラトンの詩論テクストを一書にまとめた P・マレーはこの箇所への註で「小アジアのカリアのマイアンドロス川沿いにマグネシアなる町があった…しかしマグネシアはテッサリアの地域やリュディアの町の名でもあった」と記し、μαγνήτις と地名としてのマグネシアとの関連を示唆している⁽⁴⁶⁾。岩波書店版プラトン全集の『イオン』の訳者である森進一は「エウリピデスはマグネシアの石と名づけ」たとしてうえで、「マグネシアの石」への註で「リュディアのシピュロス山の近くにも、テッタリアにも、同名の地がある。またカリアにも同名の町がある」と記している⁽⁴⁷⁾。山本は森の訳文を引用し、註の中で「マグネシアの石」に「Μαγνησίη λίθος」を当てているが、これはおそらく山本が『イオン』の原文を見ずに、「マグネシアの石」のギリシャ語表記を探したことに起因する誤記であろう⁽⁴⁸⁾。

これらの翻訳に共通するのは、μαγνήτις は古代ギリシャ世界の地名としてのマグネシア、具体的には、テッサリアの地域、リュディアの町（シピュロス山麓のマグネシア）、カリアの町（マイアンドロス沿いのマグネシア）のいずれかを形容詞化したものとする解釈である⁽⁴⁹⁾。リデルとスコットの辞書もこうした解釈の裏付けとして参照されたであろう。彼らは「Μάγνης」の項目の中で、「マグネシア人 (Magnesian)」を第一の意味に挙げ、次いで、これに対応する女性名詞 Μάγνησσα、地名である Μαγνησίη、形容詞 Μαγνητικός および Μαγνήτις を示している⁽⁵⁰⁾。彼らも従来の翻訳伝統にしたがった可能性が高いが、彼らの辞書を参照した人々が、

(45) Plato, *The Statesman, Philebus, Ion*, ed. H.N. Fowler and W.R.M. Lamb (Plato VIII, LCL 164, Cambridge, Mass./London, 1925), p. 420.

(46) P. Murray ed., *Plato on Poetry* (Cambridge/New York, 1995), p. 113.

(47) 『プラトン全集 10: ヒッピアス (大)、ヒッピアス (小)、イオン、メネクセノス』(岩波書店、1975年)、129頁。角川書店版プラトン全集の『イオン』の訳者、内藤亨代の訳語も森のそれと同様、「マグネシアの石」と「ヘラクレイアの石」である。内藤はそれぞれの語への註で、カリアのマグネシアと同じくカリアのヘラクレイアとの関連を指摘している。山本光雄編『プラトン全集 6』(1974年)、113頁および333頁を参照。

(48) 山本、前掲書、31頁。

(49) エウリピデスのロウブ版断片の編者も「Magnesian stone」と訳している。Fr. 567, p. 39.

μαγνήτις を訳す際に、Μαγνησία や Μαγνησίη の地名が先に存在するかのよう理解したことは想像に難くない。しかし、リデルとスコットの記述の多くは、前5世紀半ばに書かれたヘロドトスの『歴史』の用例にもとづくものであり、Μαγνησία や Μαγνησίη の語が、先に存在した名詞 Μάγνης や Μάγνητες (複数主格) の派生語である可能性は排除されない。むしろ、単語だけを見れば、マグネスが、マグネスの地としてのマグネシアへ派生したと理解するほうが妥当である。この可能性を支持する一つの重要な用例が、ギリシャ文学の最初期の作品の一つであるホメロスの『イリアス』にある(『イリアス』は遅くとも前7世紀半ばまでに成立したとされるが、成立年代の詳細についてここでは踏み込まない)。

マグネテス人を率いるのは、テントレドンの子プロトオス。ペネイオスの流れのほとり、また木の葉の揺らぐペリオン山の辺りに住み馴れたこの軍勢を、俊足のプロトオスが指揮し、彼に随う船は40艘。(2.756-759)⁵⁰

これは『イリアス』第2歌の有名な軍船表からの引用であり、マグネテス人の部隊はミケーネ王アガメムノンを総大将とするアカイア人の軍勢の最後に登場する。もちろん『イリアス』はエーゲ海域の後期青銅器文明の崩壊から数百年後、基本的にフィクションとして書かれた英雄叙事詩であるわけだが、ここでホメロスによって言及されているペネイオス川もペリオン山も、ピネオス川およびピリオ山として今日のギリシャでも知られている。これらの地名と実際の地理対象との対応に大きな変化がなければ、マグネテス人は物語の設定上、テッサリアのエーゲ海沿い、ペリオン山からペネイオス河口にかけての山林域に暮らしていた部族集団と考えられる。数々の伝承の舞台である古都イオルコスもペリオン山の南西山麓、今日のピガシティコス湾の北端の港町ヴォロスの近くに位置した。古代において

テッサリアのマグネシアとして知られた地域にはペリオン山や北西のオッサ山のみならず、イオルコスも含まれた⁵²。ペリオン山は主人公アキレウスにゆかりのある土地としてたびたび『イリアス』に登場する。アキレウスの父ペレウスはピガシティコス湾西部のフティアの王であったと伝えられるが、イオルコスやペリオン山のケンタウロスらと関連する物語も知られている。これまでほぼ見逃されてきた地理的特徴であるように思われるが、『イリアス』はペリオン山およびマグネシアに深いかかわりを有するローカル・ヒーローを主役として展開する叙事詩なのである。

古代のマグネシアの名は今日のギリシャではピガシティコス湾を取り巻く行政地区マグネシア(Μαγνησία)に受け継がれているが、引用のホメロスの詩行はテッサリアのマグネシアの地名の由来を説明する役割を果たしている。それが歴史的な事実であるかどうかは別として、かつてマグネテス人ないしマグネテス族が居住していた地域がマグネシアと称されるようになったという説明である。マグネシアの由来への説明は、前6世紀に書かれたと推測される偽ヘシオドスの『名婦列伝』にも見出せる。それによれば、「彼女〔デウカリオンの娘テュイア〕は身ごもり、雷を喜ぶゼウスに2人の息子、マグネスと、戦車好きのマケドンを生んだ」(断片7)⁵³。ゼウスの子と言及されるマグネスおよびマケドンが、マグネシアおよびマケドニアの語源に対する神話的説明であることは疑いない⁵⁴。

ここまでの議論をまとめると、磁石ないしマグネットの語源の一端はエウリピデスが散逸した『オイネウス』で用いた表現「μαγνήτις λίθος」にあること、さらに用法的にも伝承的にも、μαγνήτις は「マグネシアの」と訳されるべきではないことが確認された。残る問題は、形容詞 μαγνήτις が意味するところは何なのか、エウリピデスはなぜ「多くの人」の慣用に逆らってまでこの語を用いたのか、

50) LSJ, s.v. “Μάγνης”, p. 1071.

51) 松平千秋訳『イリアス』上巻、77頁。

52) マグネシアの地誌については、プリニウスの『博物誌』4.16に簡略な説明がある。プリニウスが列挙する地名にはイオルコスとペネイオス河口が含まれる。プリニウスの時代においても、『イリアス』でマグネテス人の住処として示されている地域がおおむねマグネシアと把握されていた。前後のテッサリアとマケドニアの記述との比較で、彼はマグネシアの地誌について補足や脱線の必要をほとんど感じなかったようだ。

53) Hesiod, *The Shield, Catalogue of Women, Other Fragments, Fragment Concordances*, ed. G.W. Most, rev. (LCL 57, 503, Cambridge, Mass./London, 2018). 邦訳は前掲のヘシオドス『全作品』、247頁。

ということである。重要な手がかりであるプラトンの用例を詳しく検討してみよう。プラトンのテクストにおいて、女性名詞の λίθος が登場するのは以下の6箇所である。

『イオン』

533D: τῆ λίθω...μαγνήτιν

533D: τῆ λίθω...Ἡρακλείαν

535E: τῆς Ἡρακλειώτιδος λίθου (「Ἡρακλειώτις λίθος」からの力を互いに受けると私が述べた指輪の最後が君の観客だということを君はわかっているかね)

536A: τῆς λίθου ἐκείνης (まさにあの女石からのように、合唱の舞者や教師や教師見習いらの大なる連鎖が、ムーサから連なる指輪のほとりて形成される)

『ティマイオス』

80C: τῶν Ἡρακλείων λίθων (琥珀と「αἱ Ἡρακλείαι λίθοι」の引力の不思議について、これらはどれも実際の引き付けではない)

『ゴルギアス』

486D: τούτων...τῶν λίθων, ἤ... (人がそれによって黄金を識別するあの女石の一つを私が見つけて喜ぶと君は思わないかね)

これらの用例のうち、『ゴルギアス』の「τῶν λίθων」は続く関係代名詞が女性形であるため、通常の石の意味ではないことがわかる。この語は金を

識別するための素材であることが示されており、磁石ではなく、試金石(英語では touchstone)の意味で用いられていることが明らかである。試金石としての λίθος の用例について、リデルとスコットは「λίθος」および「Λύδιος」の項目で、バッキュリデスの断片10に「Λυδία λίθος」の語句があることを指摘している⁵⁵。バッキュリデスは前5世紀前半に、シチリアのシュラクサーサイの僭主ヒエロンの宮廷で活躍した名高い抒情詩人であるが、その作品は断片でしか現存していない⁵⁶。プラトンがバッキュリデスのこの用例を知っていたかどうかは定かではないが、かりに知っていたとすれば、彼は『ゴルギアス』の当該箇所において「リュディアの」を意味する形容詞を不要と判断したことになる。一方、プラトンの他の5つの用例はいずれも磁石を指すことが文脈から明らかである。これらからは、プラトンが彼なりのルールにしたがって女性名詞の λίθος を使用していることが窺える。すなわち、彼は磁石を意味する際には基本的に形容詞を付すべきで、磁石ではない特殊な石には形容詞は不要と判断していた可能性が高い。また彼が、磁石には、英雄ヘラクレスの派生語である形容詞を当てるのが用法的に適切とみなしていたことも読み取れる。すでに確認したとおり、彼にとって μαγνήτις はエウリピデス固有の用例であり、一般には Ἡρακλεία を付加すべきであった。晩年の作と推測される『ティマ

54 この問題について参考になるのは地名マケドニアの由来である。議論の詳細は省くが、諸家の説明は、マケドニアの語の由来は神話上のマケドンないしマケドネス人とする点で一致している。従来、『名婦列伝』の断片7はマケドニア王国の起源に関する一証言として考察されてきた。かりに作者がヘレネスを自負する人であった場合、彼はマケドネス人およびマグネテス人を遠縁の部族として位置づけ、同じヘレネスの枠には含めない意図があったと推測できる。というのも、『名婦列伝』の系譜において、ヘレネス(Ἑλληνες)の祖に当たる神話上の王ヘッレン(Ἑλλην)と、マグネネスおよびマケドンの母たるテュイアは同胞とされているからである。ヘッレンはプロメテウスの子デウカリオンの息子、テュイアはデウカリオンの娘であった。それゆえ作者にとって、ヘレネスと呼べるのはあくまでヘッレンの末裔(と同時にヘッレンの息子らであるドロス、クストス、アイオロスの子孫)であり、テュイアの末裔であるマグネテスとマケドネスにヘレネスの呼称は該当しなかった。結果的に、マケドンの王国は前4世紀を通じて巨大国家へと成長したため、歴史家の関心もおのずとマケドニアに集中する向きがあるが、『名婦列伝』の作者はマケドニア台頭前の時代にあつて、テッサリアの両部族を類縁(ペア)的に把握していた可能性が高い。詳しくは、E.A. Anson, "The meaning of the term *Macedones*", *Ancient World* 10 (1985), pp. 67-68; N.G.L. Hammond, "Connotations of 'Macedonia' and of 'Macedones' until 323 B.C.", *Classical Quarterly* 45 (1995), pp. 120-128; idem, *The Macedonian State: Origins, Institutions, and History* (Oxford, 1989), pp. 1-8. マケドネスの語源は、木の高さや細さを意味する形容詞 μακεδνός と関連するとの見方が一般的であるが、印欧言語学者 R・ピークスは前ギリシャ語(pre-Greek)の可能性があると指摘している。Beekes, op.cit., p. 894. 『名婦列伝』については、M.L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women: Its Nature, Structure, and Origins* (Oxford, 1985), pp. 50-60; ヘシオドス、前掲書、490-493頁を参照。マグネネスとマケドンの語源について、筆者はセム語由来の可能性があると考えている。

55 LSJ, s.v. "λίθος", p. 1049, and "Λύδιος", p. 1064.

56 *Greek Lyric*, vol. 4: *Bacchylides, Corinna, and Others*, ed. D.A. Campbell (LCL 461, Cambridge, Mass./London, 1993). ちなみにバッキュリデスの当該断片14(p. 266)はストバイオスの引用で伝わっている。「リュディア石が金を示すように、知恵と全能の真理こそが人々の卓越を証しするのだから(Λυδία μὲν γὰρ λίθος μανύει χρυσόν, ἀνδρῶν δ' ἀρετὰν σοφία τε παγκρατής τ' ἐλέγχει ἀλάθεια...)」。

イオス』の用例で彼がこの形容詞を用いていることはその裏付けとなろう。『イオン』における磁石の3つ目の用例に現れる形容詞 Ἡρακλειώτις にプラトンがどのような意味を込めているかははっきりしない⁵⁷。この形容詞を Ἡρακλεία に置き換えても語句の意味や文脈のニュアンスが変化することはありそうにない。しかし、Ἡρακλεία と Ἡρακλειώτις のうち、語形的にヘラクレスにより近い形容詞は Ἡρακλεία であり、リデルとスコットはそれを意味論の面でも追認する。彼らは「Ἡράκλειος」の項目で「ヘラクレスの (of Heracles)」という意味を第一に示している。他方で、「Ἡρακλεώτης」の項目ではこれに「ヘラクレイアの人 (a man of Heraclea)」の意味を記し、派生的形容詞として Ἡρακλεωτικός を、さらに別の女性形として Ἡρακλεώτις を挙げている⁵⁸。つまり、リデルとスコットによれば、Ἡρακλειώτις は意味論的には英雄ヘラクレスよりむしろ、都市ヘラクレイアに近い形容詞ということになる。

このようにヘラクレスに派生する形容詞の用法を考慮することで、『イオン』533Dの二つの形容詞のニュアンスがより明確になる。プラトンによるエウリピデスと「多くの人」の用法の対比は、二つの形容詞のニュアンスの対応にもつながるものであろう。つまり、μαγνήτις λίθος は「マグネスの石」(あるいは「マグネスのような石」)と、Ἡρακλεία λίθος は「ヘラクレスの石」(あるいは「ヘラクレスのような石」)と対応的に、両者とも地名ではなく人名との関連で理解されるべきであって、「マグネシアの石」や「ヘラクレイアの石」とは訳されるべきではないのである。磁石が「ヘラクレスの石」と呼ばれた理由はプラトンの説明から類推できる。一つの磁石が複数の指輪に作用し、それらを連鎖的に引き寄せ、吊り下げるとき、ヘラクレスの人間

離れした怪力に見立てられたのであろう⁵⁹。言うまでもなく、ヘラクレスは古代ギリシャ人の間でもっとも名の通った英雄の一人であった。それではマグネスとは誰なのか、『名婦列伝』に現れるゼウスとテュイアの間に生まれたマグネスのことなのか、それとも実在が確認される人物のことなのか。エウリピデスが『オイネウス』かその他の作品で語源の詳細を自ら明かしていたならば、この種の問いが意味を持つはずはなかった。さらに言えば、プラトンが『イオン』にエウリピデスの語句を引かなければ、この問い自体が存在しなかったかもしれない。というのも、今日、フォティオスの辞書と『スーダ』以外に、この語句の由来を『オイネウス』であると明かす記述が確認されないという事実は、『オイネウス』がエウリピデス作品の中でもとくに読み手の少ない(よって引用も少なく、散逸リスクも高い)作であったことを示唆するからである⁶⁰。エウリピデスの意図に誰も気づくことなく、『オイネウス』自体が散逸する可能性もあったわけである。他方で、古代の多くの人々はプラトンの『イオン』を読むことで、磁石なる天然物に対する、エウリピデスの語句を知ったと思われる。プラトン自身もその語源について沈黙していることから、『イオン』の読者も磁石をどのように表現すべきかの指針を持たず、各々の判断や好みを優先したと思われる。一つの最たる例はアリストテレスの用例であり、彼はプラトンの有望な弟子であったにもかかわらず、形容詞をとまなわぬ女性名詞のみの表現を選んだ。一方、アリストテレスの弟子テオフラストスは『石について』で、磁石を意味する ή λίθος が Ἡρακλεία と呼ばれると記している。また快楽主義哲学の祖であるエピクロスの断片 293には Ἡρακλεία をともなう用例がある。彼らはプラトンの紹介する一般的な用例にしたがったということになる。興味深いのは、

57) 単に形容詞 μαγνήτις に語尾をそろえるためにプラトンがそうした可能性もある。

58) LSJ, s.v. “Ἡράκλειος” and “Ἡρακλεώτης”, p. 777.

59) 『イオン』の訳者、森進一もこの考えを取る。「カリアのマグネシアの南ほぼ 25 マイルあたりに同名の町 [ヘラクレイア] があるが、しかしおそらくは、その石の牽引力を、絶大の能力をもっていた英雄ヘラクレスと結びつけて言われているのであろう」(『プラトン全集 10』、129 頁、註 3)。山本はこの語に関して、リュディアの地名ヘラクレイアによるのか、英雄ヘラクレスによるのか「その点はよくわからない」(31 頁)と記しているが、本文で示したとおり、用法的にはヘラクレス由来が正しい。

60) 『オイネウス』はエウリピデスのキャリア初期から中期にかけての上演作と考えられている。有力な根拠は同時代の喜劇詩人アリストファネスによって供される。彼は『オイネウス』のテキストを知っていたようで、前 405 年の作『蛙』73 で一節を引いている(古註の指摘: 71-72, ff. 565)。さらに前 425 年の作『アカルナイの人々』418-420 では、エウリピデス自身が作中に登場し、舞台上で用いたというオイネウスのぼろ着を主人公に見せている。古註はこの箇所をエウリピデスの実際の作『オイネウス』への言及としている。これが正しければ、『オイネウス』は前 425 年より前に上演されたことになる。

μαγνήτις λίθοςの派生表現のヴァリエーションである。リデルとスコットは具体的に、ή Μαγνήτις、ή Μαγνησίη λίθος、ή Μάγνησσα、ό Μάγνης λίθος、ό Μάγνης、Μάγνης ό πνέων、ό Μαγνήτης λίθος、ή Μαγνήτις πέτραを挙げている⁽⁶¹⁾。当然、これらはすべて前4世紀以降の用例である。たしかにプラトンの引用によって結果的に、エウリピデスの用例は当時の慣例を押しつけるほど大きな知名度を得たかもしれないが、その語源や彼の着想が不明確であり続けたため、ヘレニズム期を通じて著しい表現の揺らぎが生じたのである。

3. ルクレティウスと大プリニウス

人は磁石をどう呼べばよいのか、どの呼び方がもっとも妥当なのか。これはギリシャ人の哲学に傾倒したローマ人の奇才にとっても引っかけの疑問であったようだ。その人とはルクレティウス、『物の本質について』の著者として知られる詩人哲学者である。彼の経歴は断片的にしか知られていないが、前1世紀前半に活動し、エピクロス哲学の概要や原子論的世界観を韻文で歌い上げるラテン語の書を書き上げ、前50年頃に死んだと考えられている。エピクロスの著述が断片でしか現存しないため、自然の諸事物や諸事象に対するルクレティウスの説明がどの程度エピクロスの教説に依拠するのかが解明しえないけれども、ほとんどがエピクロスの教説の独創的な詩的変奏であると解するのが定説である。磁石に対する原子論的説明は第6巻の終わり近くから始まる。

あの石は、いかなる自然の絆ゆえ、鉄を引くことができるのか。マグネテス人の祖国の境で見つかるがゆえ、始祖の名によりギリシャ人がマグネスと称するあの石は。(6.906-909)⁽⁶²⁾

これらの詩行はルクレティウスがエピクロスのテクストだけでなく、プラトンのギリシャ語原典にも親しんでいたことを示唆する。というのも、彼は磁石について、エピクロスが用いたヘラクレスの形容詞を当てず、『イオン』にある形容詞 μαγνήτις のニュアンスを踏まえた、ラテン語 *Magnes* を当てているからである。つまり彼は、エウリピデスによる形容詞 μαγνήτις を地名であるマグネシアの形容詞ではなく、マグネテス人の神話上の祖マグネスの形容詞であると、用法的に正しく理解したのである⁽⁶³⁾。彼の考えでは、磁石はマグネテス人の祖国 (*patria*) であるマグネシアの境 (*finis*) で出土するため、ギリシャ人から「マグネスの石」と称されていた。ルクレティウスが『イオン』をじかに参照した可能性は上の引用に続く詩行からも示される。「この石は人々を驚嘆させる。というのも、それはしばしば自身から吊り下がる指輪の鎖を作り出すから」(6.910-911)⁽⁶⁴⁾。ルクレティウスの用例は疑いなく、磁石の語源をめぐる彼独自の見解に根差している。というのも、ギリシャ哲学の伝統において、「マグネスの石」の呼称はかならずしも一般化せず、語源が明確に説明されることもなかったからである。すでに確認したとおり、プラトンもテオフラストスもエピクロスも「ヘラクレスの石」の呼称を好んでいた。磁石の語について、ルクレティウスはあえてエピクロスの用例から離れ、『イオン』を介してエウリピデスの用例に遡り、テッサリアのマグネシアに興ったマグネテス人の祖マグネスが本当の語源であるとの考えを表明している。

ルクレティウスの用例およびその書への評価が、*Magnes* の語をローマ世界に根付かせる役割を果たしたことは想像に難くない。後1世紀に政治家としての務めを果たしながら、歴史に残る大著『博物誌』

(61) LSJ, s.v. “Μάγνης”, p. 1071.

(62) Lucretius, *De Rerum natura*, ed. W.H.D. Rouse and M. Ferguson Smith (LCL 181, Cambridge, Mass./London, 1975), pp. 560-562:
Quod superseset, agree incipiam quo foedere fiat
naturae, lapis hic ut ferrum ducere possit,
quem Magneta vocant patrio de nomine Grai,
Magnetum quia fit patriis in finibus ortus.

(63) ラテン語の *Magnetum* (形容詞 *Magnes* の複数属格) に対し、ロウブ版の訳者ラウズは「the Magnetes」を、邦訳者の樋口勝彦は「マーグネテース人」の語を当てている (ルクレティウス『物の本質について』岩波文庫、1961年、304頁)。彼らの訳は用法的に正しい。

(64) Lucretius, *De Rerum natura*:
hunc homines lapidem mirantur; quippe catenam
saepe ex anellis reddit pendentibus ex se.

を書き上げたプリニウスも、磁石についてはルクレティウスの影響を受けている。彼は大理石に次ぐ重要な石として *Magnes* が思い浮かぶと述べ、彼の書の最たる特徴である蘊蓄の披露へと進む。磁石が鉄を引き付ける力について、彼は空白 (*inane*) との関連で説明するが、これは真空 (*vacuum*) を介した原子の働きに原因を帰したルクレティウスの説とほぼ同じである。さらにプリニウスは磁石への別の呼称、「鉄石 (*sideritis*)」と「ヘラクレス石 (*Heraclia*)」があると記す⁶⁵。前者は「鉄のような石」を意味する *σιδηρίτις λίθος* に由来すると思われるが、後者はプラトン自身が好んだギリシャ語の用例である。ルクレティウスと同様、プリニウスもラテン語で磁石を述べるに際して、*Ἡρακλεία* ではなく、*μαγνήτις* の形容詞を意識的に優先している。『博物誌』は磁石について、他の著述では伝わらないあるギリシャ詩人の見解を伝えている点でも重要である。

ニカンドロスの書き物によれば、それは発見者にちなんでマグネスと称される。それはイダで見つかったのであるが、実はヒスパニアを含め、あちこちで発見される。しかしその話では、彼 [マグネス] は群れの世話をしているときに、サンダルを釘と杖の端がくっつくのを見てそれを発見したのである。(36.25)⁶⁶

これは古代ギリシャにおいて磁石の語源をイダのマグネスなる人物に関連させる唯一の証言である。ただし、これは一見して事実としての信憑性に欠ける、神話的証言である。というのも、イダ山 (今日のトルコではカズダーと称される) で誰かが特別な何かに気づく、あるいは特別な誰かに出会うという話の型は、トロイア戦争に関連する伝説によく見られる型だからである。たとえば、トロイア王プリアモスの王子パリスは誕生直後、不吉な予言を気にした王からイダの山中に捨てられたが、牧人に拾われ、その息子として育てられた (エウリピデス『アレクサンドロス』)。またパリスはそこで牧人として暮らす中、川の神ケブレノスの娘であるニンフ、オ

イノネと出会って恋に落ち、つかの間の夫婦生活を送った (パッキュリデス断片 20D)。パリスが3女神の美しさに判定を下したのも彼がこの山にいたときである (『キュプリア』)。トロイアの英雄アイネイアスの父アンキセスもイダで女神アフロディテに見初められ、息子アイネイアスを儲けたとされる (『イリアス』第2歌)。またイダは地母神 (キュベレおよびレア) 信仰と深く関係する土地でもあった (オウィディウス『祭暦』)。あくまで神話論としては、神がかり的な引力を有する天然物が伝説の宝庫のような山で発見されたとする説明は筋が通っているうえ、発見者をマグネスという名の人物に帰する説明はすでに確認したとおり、用法的条件を満たしてもいる。

それではニカンドロスなる書き手 (*auctor*) は何者なのか。ロウブ版の訳者アイホルツはニカンドロスへの註で「コロフォンのニカンドロスの不明の詩から」と記しているが⁶⁷、これはプリニウスが薬草、薬石、有毒生物の記述のためにたびたびニカンドロスを参照していることから判断して、間違いはない。コロフォンのニカンドロスは前3世紀から2世紀にかけて活動したことが知られる詩人であり、今日、ほぼ全体が伝わる作は『有毒生物誌』と『毒物誌』の二つしかないが、かつては多くの作品が知られ、読まれていた⁶⁸。地誌や辞書に関連する作品も残したとされるが、彼が得意としたのは医学や薬学、生物学関連の詩作であった⁶⁹。プリニウスはヒッポクラテスらの散文著作に加え、ニカンドロスらの韻文著作も精力的に参照し、その蘊蓄を増すのに活用したのであろう。彼は上の引用に続けて、ソタコス (前3世紀頃の鉱物学者) の情報として、5つの主要な産地があると記し、最後に磁石の薬石としての効用に触れる。この最後の薬学的記述も、ニカンドロスの散逸した詩による可能性がある。

トロイア伝説の定番の型にならうものとはいえ、ニカンドロスの伝える話に何の信憑性も認めないのは行き過ぎかもしれない。この詩人の出身地ないし

65) Pliny, *Natural History*, ed. H. Rackham, tr. D.E. Eicholz, vol. 10 (LCL 419, Cambridge, Mass./London, 1979), 36. 25, p. 100.

66) *Ibid.*, p. 100: *magnes appellatus est ab inventore, ut auctor est Nicander – in Ida repertus, namque et passim inveniuntur, in Hispania quoque; - invenisse autem fertur clavis crepidarum, baculi cuspidis haerentibus, cum armenta pasceret.*

67) *Ibid.*, p. 101.

68) ニカンドロスの邦訳は、アラトス/ニカンドロス/オッピアノス (伊藤照夫訳)『ギリシア教訓叙事詩集』(京都大学学術出版会、2007年)に収録されている

69) 詳しくは、伊藤の解説 (同書、503-511頁) と *New Pauly*, s.v. “Nicander” [4] を参照。

居住地であったと思しきコロフォンはイオニア地方の主要都市の一つであり、他の伝承とともに磁石の語源や起源をめぐる話がそこに伝わっていたとしても不思議ではない。たとえば、ホメロスの出身地がコロフォンであるという伝承は古代のコロフォン人がとりわけ好み、ギリシャ世界に盛んに広めようとしたものであった。ホメロス叙事詩の主たる方言はイオニア方言であるため、ホメロスの出身地がコロフォンであるとする古説は、言語学的にかならずしも荒唐無稽というわけではない。暗黒時代からアルカイック期にかけて、ギリシャ本土から小アジア沿岸域へのギリシャ人の移住が進んだと考えられているが、イオニア地方の北の沿岸やレスボス島には、アイオリス方言を用いるアイオリス人が定着したとされる。アイオリス地方の東の内陸ではサルデイスを首都とするリュディア王国が栄えた。トロアスとミュシアの両地域の境に位置し、南にアドラミュッティオン湾（今日のエドレミト湾）を、南西にレスボスを望むイダ山は、アイオリス人やリュディア人にとっても馴染みの地であったろう。なお湾の名の由来であるアドラミュッティオンの町（今日のエドレミト）は前6世紀にリュディア王アリュアッテスの息子アドラミュスによって築かれたと伝えられている。

ニカンドロスの話題に関して、タレスが磁石と琥珀の作用に注目したとの証言が想起されるべきであろう。彼はイオニアのミレトスの人であり、彼の死後もミレトスはしばらく自然哲学の拠点であった。コロフォンは哲学者クセノファネスの出身地として

も知られる。つまり、かりに磁石がイオニア地方で最初に発見されたのなら、比較的早くからイオニア由来とわかる呼称なり伝承なりが成立したはずである。ニカンドロスの説に多少の実体があるとすれば、磁石は小アジアの西部、イダ山か近隣の山地で発見されたという伝承がイオニアでも広まっていたのであろう⁷⁰⁾。なおプリニウスはソタコスの書によりつつ、小アジアではトロアスのアレクサンドレイア付近とマグネシアの二つの産地があると記している⁷¹⁾。彼の言う「アジアのマグネシア (Magnesia Asiae)」がマイアンドロス沿いのマグネシア（カリア）とシピュロス山麓のマグネシア（リュディア）のいずれを指すのかは推測によらざるをえないけれども、ロウプ版『博物誌』には「スミュルナの東北東25マイル、古代のマグネシアであるマニサでは今も磁鉄鉱が見つかる」とのS・スミスの注記がある⁷²⁾。今日のマニサはシピュロス山麓のマグネシアのことであり、プリニウスが言及する土地はリュディアのマグネシアであるのはほぼ確実である⁷³⁾。

この点で注目に値する語句が悲劇詩人ソフォクレスの断片800にある。「あなたは遠くから鉄を引き寄せるリュディアの石のようだった (Λυδική λίθος...σίδηρον τηλόθεν προσηγάγου)」⁷⁴⁾。この断片は5世紀ないし6世紀に編纂されたアレクサンドリアのヘシュキオスの辞書にのみ伝わり、ソフォクレスのどの作品に現れるのかは不明である。Λυδική λίθοςの形容詞Λυδικήは女性形であり、鉄を引き寄せたと示されていることから、これが磁石を意味することは明白である。「リュディア石

70) これについて興味深いのは、古代のホメロス伝の一つである偽ヘロドトスのテキストの中に、アイオリス地方のフォカイアにいたホメロスが、イダ山で鉄が発見されるとの予言をしたという記述があることである。ホメロスはいまだ実在がはっきりしない詩人ではあるけれども、別系統の二つの伝承において、イダ山が鉄および磁石の発見と結び付けられていることは注目に値する。つまり、それは小アジアのギリシャ人の間では、イダ山が鉄および磁石の最初の産地として伝承されていたことを示唆する。さらにこの伝承については、鉄の原料が鉄鉱石であること、磁石が磁鉄鉱という鉄鉱石の一種であること、磁石は鉄鉱石と同じ場で見つかること、ギルバートの指摘が想起されるべきであろう。中務哲郎訳『ホメロス外典／叙事詩逸文集』（京都大学学術出版会、2020年）には偽ヘロドトスの訳も収録されている。

71) その他の3つは、プリニウスの言及する順に、エチオピア、(テッサリアの) マグネシア、ポイオティアのヒュエトゥスである。5つの産地のうち、最高の磁石はエチオピア産であると彼は記している。

72) Pliny, *Natural History*, p. 103.

73) ただし、プリニウスはアジアのマグネシア産の磁石は白色で、鉄を引き寄せないとしている。これは磁石ではなく、タルク（滑石）のことかもしれない。テオフラストスは『石について』41で「マグネスの石 (ή μαγνήτις λίθος)」を銀に似た石と説明している (Théophraste, *Les pierres*, ed. S. Amigues [Paris, 2018], p. 13)。彼は別の箇所(4)で、牽引力を有する石に Ἡρακλεία の形容詞を当てていることから、この石は磁鉄鉱とは別種の、外観が銀に似た鉱物である。Cf. Theophrastus, *On Stones: Introduction, Greek Text, English Translation, and Commentary*, ed. E.R. Caley and J.F.C. Richards (Columbus, 1956), pp. 144-145.

74) Sophocles, *Fragments*, ed. H. Lloyd-Jones (Sophocles III, LCL 483, Cambridge, Mass./London, 1996); Hesychii Alexandrini *lexicon, recensuite et emendavit* Kurt Latte, 2 vols. (Hauania, 1953-1966), Λ 1350.

(Λυδία λίθος)』についてはすでにバッキュリデスの用例を確認したが、このシチリアの詩人はその語を試金石の意味で用いていた。ソフォクレスは世代的にバッキュリデスとエウリピデスの間に来る詩人であり、長年にわたってアテナイで活躍し、前世代のアイスキュロスを上回る名声を博した。2人の詩人の用例は前5世紀時点で、試金石と磁石の双方がギリシャ世界ではリュディア由来と認識されていた可能性を示唆する。しかし、磁石への「リュディアの石」の呼称は定着しなかったと見えて、リデルとスコットはソフォクレスの用例しか挙げていない⁷⁵⁾。ソフォクレスに次いでアテナイの演劇界に現れた大物エウリピデスがソフォクレスの用例を踏まえ、土地としてのリュディアと磁石の関連を念頭に、独自の変更を加えたのはほぼ確実である。Λυδική λίθος から μαγνήτις λίθος へ、リュディアの石からマグネスの石へ。このマグネスはニカンドロスが伝えるところのイダ山の牧人マグネスなのか。エウリピデスはニカンドロスと同じ伝承を知っていたのであろうか。それとも彼はこの牧人とは別の、リュディアのマグネスなる人を知っていたのか。然りというのがこの問いへの筆者の答えである。エウリピデスのみならず、おそらくプラトンも、そのマグネスを知っていた。

4. 忘れられた詩人、スミュルナのマグネス

彼は牧人ではなく詩人、ウェストが自選論集『ヘッレニカ』第1巻に初めて発表した論文の表題

にしたがえば、「スミュルナのマグネス」、「ギュゲスの宮廷のギリシャ詩人」であった⁷⁶⁾。ウェストはその論文をこう始める。「文学史家からほとんど忘却されている人物について私は書く。彼の項目はREにも *New Pauly* にもないし、彼の名は本論読者の大半には目新しいものとなろう。けれども彼はその時代にあっては著名人であり、局所的に何世紀にもわたって記憶された。彼は『イリアス』の詩人を知っていたかもしれない叙事詩の歌い手で、イオニアとリュディアという隣接する文化の橋渡しをした。彼はスミュルナの出身で、その名はマグネスであった」⁷⁷⁾。スミュルナは今日のイズミールに当たり、エフェソスのギリシャ系住民の一部が北に移って建設したポリスであると伝えられる。そのため、スミュルナはイオニア地方とアイオリス地方のほぼ境にある、イオニア系のポリスということになる。彼が『イリアス』の詩人、すなわちホメロスを知っていたかもしれないというのは、ホメロスその人もスミュルナ出身との伝承が古典期から古代末期にかけて広く流布していたからである。このマグネスがリュディアにも関連するのは、すぐ後で引用する証言にあるように、ギュゲス王（前680-644年頃）のうら若き恋人であり、リュディア人の勝利を称える叙事詩を歌ったと言われるからである。ギュゲスについては、ヘロドトスの『歴史』第1巻にカンダウレスからの王位篡奪の経緯が詳しく記されているが、スミュルナ出身の詩人マグネスについては言及がない。つまり、ヘロドトスが彼を知っていたかど

75) テオフラストスは『石について』4で、金および銀を識別する石を「リュディア石 (ή Λυδή)」と記している。テオフラストスの影響により、磁石にリュディアの形容詞を当てる用例は以後ほぼ使用されなくなったと推測できる。しかし重要な点は、前5世紀のギリシャ世界において、磁石に対する画一的な用法が存在しなかったことである。なお、リュディアに関連して、ヘロドトスは『歴史』1.93でトゥモロス山で砂金が採取されることをかの地の名物として伝えている。金の産地では早くから試金石が使用されていたはずであり、前5世紀の一部のギリシャ人が試金石を「リュディア石」と呼んだことには十分な根拠がある。

76) M.L. West, "Magnes of Smyrna: A Greek Poet at the Court of Gyges", in: idem, *Hellenica: Selected Papers on Greek Literature and Thought*, vol. 1: *Epic* (Oxford, 2011), pp. 344-352.

77) Ibid., p. 344. エウリピデスの語句の選択の背後にいたマグネスの別の候補は、前5世紀前半にアテナイで数々の作を上演し、市民に大いに好まれた喜劇詩人のマグネスである。彼の往時の評判と加齢にともなう不評については、アリストファネスが『騎士』518-525で言及している。マグネス自身はアッティカかアテナイの出身と伝えられ、活動の地もアテナイであり、リュディアとの直接のつながりはなかったようであるが、『リュディア人たち』という喜劇を上演したとの伝承がある（『スーダ』にも彼の項目がある：μ 20）。残念ながら、彼の作品は若干の断片しか残っておらず、それらの断片についても真正性が疑われている。前5世紀のアテナイで著名であったこのマグネスをエウリピデスが念頭に置いていたのであれば、エウリピデスの意図に他のアテナイ人も気付いていくべきであるが、そうした証拠はない。エウリピデスに文学的影響を与えたマグネスは、一世代前のアテナイの喜劇詩人ではなく、リュディア王ギュゲスからもマグネスの女たちからも愛された吟遊詩人（ラブソードス）のマグネスであるというのが筆者の確固たる立場である。喜劇詩人のマグネスについては、*Fragments of Old Comedy*, ed. I.C. Storey, vol. 2 (LCL 514, Cambridge, Mass., 2011), pp. 338-353; RE, s.v. "Magnes" [3]; *New Pauly*, s.v. "Magnes" [3] を参照。

うかは定かではない。事情はトゥキュディデスやクセノフォンのようなヘロドトス以降の著名な歴史家についても同じである。ウェストが述べるように、マグネスが今日ほとんど注目されないのは、人目に付きにくい場所で、ほとんど偶然のような形でその逸話が継承されたからである。

マグネスの情報を今日に伝えるのは10世紀に成立した二つのテキストである。一つは、ビザンツ皇帝コンスタンティノス7世ポルフィロゲニトス(945-959年)が編纂を命じた『歴史抜粋(Historica excerpta)』⁷⁸⁾の一部である「美德と悪徳について(De Virtutibus et vitiis)」⁷⁹⁾、もう一つは本稿でもたびたび言及された辞書『スーダ』である。ちなみにマグネスに関する後者の記述は、おそらく(原典からではなく)前者からの再録の形で「マグネス」の項に置かれ、文章はほぼ同一である。つまり、皇帝コンスタンティノス7世が史料編纂事業に乗り出さなければ、マグネスの伝承は中世のビザンツで途絶えてしまい、現代に伝わらなかった可能性が高い。羊皮紙の写本はよほど良好な保存環境になれば、湿気や虫食いによって早い場合は数十年で、長くとも数百年のうちに朽ち、結果、散逸してしまうが、10世紀の編纂者が参照した文献、すなわちダマスコスのニコラオスの史書も国家的事業の後、同様の道をたどったものと思われる。周知のとおり、古代や中世の手書き写本は、別の新たな写本に持続的に書写されなければ、物理的にどこかで消え去る運命にあった。

スミュルナのマグネスなる詩人について、10世紀の抜粋として伝わる記述は比較的短い。

マグネスはスミュルナの人であり、ほかの人と同様、美しい姿をしており、詩作と音楽の双方で名高かった。彼は立派に身を飾る習いで、紫の服をまとい、金のひもで長髪を結び上げると、町々へ繰り出し、詩作を披露した。誰も彼もがこの人を愛したが、なかんずくギュゲスが熱愛し、彼を稚児として召抱えた。マグネスは行く先々であらゆる女を熱狂させたが、マグネテス人の女たちがとくにそうで、彼は彼女らと交わった。するとそれらの身内は恥を覚えて煩

悶し、マグネスはその叙事詩の中で、アマゾン族に対する騎馬戦でのリュディア人の勇猛を歌ったけれども、彼らについては何も言及しなかったという口実をこしらえ、そのもとへ駆けつけると服を引き裂き、髪を切り、徹底的に辱めた。ギュゲスはこれに憤激し、マグネテス人の地に何度も攻め込み、しまいには町を攻略した。そして彼はサルデイスに帰還して豪勢な祝祭を催した。

Μάγνης ἦν ἀνὴρ Σμυρναῖος, καλὸς τὴν ἰδέαν εἶ τις καὶ ἄλλος, ποιήσει τε καὶ μουσικῆι δόκιμος, ἤσκητο δὲ καὶ τὸ σῶμα διαπρεπεῖ κόσμῳ, ἀλουργῆ ἀμπεχόμενος καὶ κόμην τρέφων χρυσῶι στρόφῳ κεκορμυβωμένην, περιήκει τε τὰς πόλεις ἐπιδεικνύμενος τὴν ποίησιν. τούτου δὲ πολλοὶ μὲν καὶ ἄλλοι ἦρων, Γύγης δὲ καὶ μᾶλλον τι ἐφλέγετο, καὶ αὐτὸν εἶχε παιδικά. γυναικῶν γε μὴν πάσας ἐξέμηνεν, ἔνθα ἐγένετο ὁ Μάγνης, μάλιστα δὲ τὰς Μαγνήτων, καὶ συνὴν αὐταῖς. οἱ δὲ τούτων συγγενεῖς ἀχθόμενοι ἐπὶ τῆι αἰσχύνῃ, πρόφασιν ποιησάμενοι ὅτι ἐν τοῖς ἔπεσιν ἦισεν ὁ Μάγνης Λυδῶν ἀριστείαν ἐν ἵππομαχίαι πρὸς Ἀμαζόνας, αὐτῶν δὲ οὐδὲν ἐμνήσθη, ἐπαίξαντες περικατέρορξάν τε τὴν ἐστήθα καὶ τὰς κόμας ἐξέκειραν καὶ πᾶσαν λώβην προσέθεσαν. ἐφ' οἷς ἤλγησε μάλιστα Γύγης, καὶ πολλάκις μὲν εἰς τὴν Μαγνήτων γῆν ἐνέβαλεν, τέλος δὲ καὶ χειροῦται τὴν πόλιν, ἐπανελθὼν δὲ εἰς Σάρδεις πανηγύρεις ἐποίησατο μεγαλοπρεπεῖς.⁸⁰⁾

ウェストはこの記述の英訳とギリシャ語原文を併記した後、マグネスが架空の人物ではなく、イオニアとリュディアの双方の文化圏にまたがって活動した実在の詩人であることを示そうと努め、彼自身が強力な論者でもある古代ギリシャ・近東域の文学的交流テーゼの一つの証拠たりうると考えている。「もしイオニアの一詩人がサルデイスへも行けたの

⁷⁸⁾ *Excerpta Historica iussu Imp. Constantini Porphyrogeniti confecta*, ed. U.Ph. Boissevain et als, 4 vols. (Berlin, 1903-1910).

⁷⁹⁾ *Excerpta de virtutibus et vitiis*, ed. Th. Büttner-Wobst, 2 vols. (Berlin, 1906-1910).

⁸⁰⁾ *Excerpta de virtutibus et vitiis*, part 1, p. 343; *Suidae Lexicon*, μ 21; *FGrHist* 90 F62; West, "Magnes", p. 344.

なら、私が仮説として考えたような〔主として近東からギリシャへの〕コミュニケーションラインがありえたということになる。先に指摘されたように、『イリアス』の詩人はマグネスと同じ時代に生きており、少なくともその生涯の一時期、同じ地域へ移動したのである⁽⁸¹⁾。

これらはいまだ学界で十分に認知された学説とはいえないが、ウェストはホメロス叙事詩が『ギルガメシュ叙事詩』等の近東文学の強い影響下で成立したこと⁽⁸²⁾、少なくとも『イリアス』の詩人（彼は晩年の著作⁽⁸³⁾でこの詩人をホメロスと区別するためにPと、『オデュッセイア』の詩人をQと称している）はトロイアやトロアス地方のみならず、リュディア中心部の地理にも通じていたことを主張している。彼はスミュルナのマグネスがホメロス叙事詩、とくに『イリアス』の成立に通じる国際交流および文学的活況をじかに知る、Pとは別の重要詩人と考えているわけである。スミュルナのマグネスは何者なのか、彼は実在した詩人なのか。ウェストがコンパクトに追跡したこれらの問いももちろん重要であるけれども、本稿での筆者の関心はマグネスの逸話の信憑性よりもむしろ、エウリピデスが、その実在の問題はどうあれ、このマグネスを知っていたかという点にある。本稿の問いはあくまで磁石の語源は何であるのか、エウリピデスはなぜ μαγνήτις の形容詞を用いたのか、である。スミュルナのマグネスはニカンドロスの紹介するイダの牧人マグネスよりも有力な候補である。というのも、彼はリュディア王に深く愛され、その宮廷で活躍した詩人とされるため、μαγνήτις の地理的条件であるリュディアつながりを満たすからである。

マグネス記述の出典であるダマスコスのニコラオスの史書をエウリピデスが知っていた可能性は、ニコラオスが前1世紀後半の歴史家であることから

論外である。ニコラオスはヘロデ大王に仕えた歴史家であり、世界の始まりから前4年のヘロデの死まで、144巻からなる世界史の大著をギリシャ語で著したとされる⁽⁸⁴⁾。第1巻から第7巻までの記述は上述の『歴史抜粋』の引用として比較的よく残されているが、第8巻から最終巻までは若干の断片的引用でしか知られていない。網羅的かつ長大な史書であっても、古代の文人からの評価はかならずしも高くなかったことがテキストの部分的かつ断片的な現存状況から窺える。おそらく古代の評価とも関連するのが、その執筆の方法であり、古い時代の記述（アッシリア、メディア、リュディア、ペルシャ、初期ギリシャ）は先行する歴史書に大きく依拠したものと考えられている。マグネスに関する引用はニコラオスの史書のうち、前7・6世紀頃のギリシャおよび近東地域を対象とする第7巻からであるが、リュディアに関する彼の記述は、リュディア人（あるいはサルデイスの）クサントスの『リュディア誌』に依拠すると見るのが定説である。たとえば、ウェストは以下のように述べる。「リュディア事情について、ニコラオスがサルデイスのクサントスの『リュディア誌 (*Lydiaka*)』から直接話を引いているのは明らかである。語順まで正確とは言えないかもしれないが、マグネスの逸話の全体がクサントスに由来することもあり得る。クサントスは〔前〕5世紀末にかけて執筆した」⁽⁸⁵⁾。

マグネスの逸話をめぐるテキスト伝承はいささか込み入った道をたどっているが、年代順に展開をまとめると、まず前5世紀後半にリュディア人クサントスの『リュディア誌』が成立し、前1世紀後半にその記述がダマスコスのニコラオスの史書の第7巻に取り込まれ、10世紀にその第7巻のリュディア関連の多くの記述が『歴史抜粋』に引用され、その中のマグネスの記述はそのまま『スーダ』に再録

(81) West, "Magnes", p. 352.

(82) このテーマでの彼の主著は、*The East Face of Helicon: West Asiatic Elements in Greek Poetry and Myth* (Oxford, 1997) である。ウェストはこの研究の後、初期ギリシャ文学と古印欧文学との比較研究に向かい、*Indo-European Poetry and Myth* (Oxford, 2007) を出版した。これらは、古代ギリシャ文学を主題とする比較文学史の金字塔的業績である。

(83) 具体的には、*The Making of the Iliad: Disquisition and Analytical Commentary* (Oxford, 2011) と *The Making of the Odyssey* (Oxford, 2014) の2作。

(84) 詳しくは、*FGrHist*, 2.3, 90, pp. 229-291; *RE*, s.v. "Nikolaos (Damask.)"; *New Pauly*, s.v. "Nicolaus" [3] を参照。

(85) West, "Magnes", pp. 345-346. リュディア人クサントスとその著述については、L. Alexander, *The Kings of Lydia and a Rearrangement of Some Fragments from Nicolaus of Damascus* (Ph.D. dissertation, Princeton University, 1913); L. Pearson, *The Early Ionian Historians* (Oxford, 1939), pp. 109-138 (chap.3: Xanthus the Lydian); *RE*, s.v. "Xanthos der Lyder"; *New Pauly*, s.v. "Xanthus" [3] を参照。

された、となる。『リュディア誌』もニコラオスの史書も中世のある時点で散逸し、私たちが今参照できるのは『歴史抜粋』と『スーダ』のみである。マグネス関連の文章自体は10世紀に由来する文献でしか確認できないとしても、その最古の典拠は前5世紀の書き物であるというのが議論の要点である。クサントスはカンダウレスという名のリュディア人の父とギリシャ人の母の間に生まれたとされ、おそらくはリュディア語とギリシャ語の双方を使いこなし、ギリシャ人読者のためにリュディアの歴史や諸王の事績について一書を物したのであろう。前4世紀のキュメのエフォロスはクサントスをヘロドトスに先行し、その書で後者を導いた歴史家と伝えているが⁸⁶、『歴史』のリュディア関連の記述に、クサントスに由来する記述からの明確な影響が見られないことから、彼の書は前5世紀後半か、ウェストの示すとおり5世紀末にかけて書かれたものと思われる。クサントスは年代的にも地域的にもヘロドトスの史書の影響を受けたはずであり、『歴史』の簡略なリュディア記述を質量ともに凌駕する内容を指し、読者の好奇心をより強く刺激する逸話を集めようとしたことは想像に難くない。天才詩人マグネスはあのギュゲスの年少の恋人(παιδικά)であった、彼はマグネテス人の女たちとの交合に勤しんだ、その結果、詩人は彼らから手ひどい辱めを受け、ギュゲスは恋人の仇を取るべく戦争を起こした、こうした珍妙なエピソードの真偽はもはや確認しようがない。一つたしかなことは、クサントスがヘロドトスと同じように、エキゾチックでにわかには信じ難い話題を畳みかけることで、ギリシャ人読者の受けを狙ったということである。民衆の受けを狙う、民衆に娯楽や技芸を提供し、見返りに名誉や実利を得ようとする。これはヘロドトスやクサントスのような文筆家のみならず、悲劇詩人や喜劇詩人、あるいは吟遊詩人や音楽家にも当てはまる根源的な欲求であった。

エウリピデスが実際にクサントスの『リュディア誌』を読んだかどうか、これは別の場でより細かく論ずるべき問いであろう。それでも、前5世紀後半にアテナイで華々しく活躍したエウリピデスが、創作の素材やヒントを求めてそれを読んだ可能性は高い。筆者がそう考える文学的状況証拠を二つ挙げて

おこう。一つはエウリピデスの『オイネウス』、μαγνήτις λίθοςの語句が用いられた散逸作である。現存する便概によれば、この悲劇はカリュドンの王位を兄弟によって奪われた老オイネウスの屈辱をめぐって展開した。オイネウスもこの悲劇も一般の知名度はほとんどないが、『イリアス』において彼は主要な英雄の一人、ディオメデスの祖父、あるいはディオメデスの父テデウスの父に当たる英雄として、英雄たちが語る余談や先例(パラダイグマ)の中で何度も言及される。その意味で、オイネウスは『イリアス』の詩人のみならず、『イリアス』の最初の聞き手や読み手であった人々にも馴染み深い人物であったと思われる。もう一つはプラトンの『イオン』、μαγνήτις λίθοςの用例のその後の普及において、疑いなくエウリピデスの『オイネウス』以上に大きな役割を果たした作である。この対話篇については、「イリアスについて」という副題に加え、全体のテーマがホメロス叙事詩の特別な魅力であることが想起されねばならない。つまり、『オイネウス』も『イオン』もホメロス叙事詩に密接に関係するテキストであり、その二つでμαγνήτις λίθοςの語が現れるのである。これは偶然であろうか、それとも必然か、2人の偉人による意識的で意図的な選択なのか。

スミュルナのマグネスの技芸が注目に値する。彼は「詩作と音楽」に秀でた若輩であり、アマゾン族に対するリュディア人の勝利を称える「叙事詩(τὰ ἔπη)」を歌ったことを口実に、マグネテス人からの暴力を受けた。彼は『イオン』に登場するホメロス叙事詩の朗誦名人イオンのように定番の作の歌い手(アオイドス)ではなく、自作の叙事詩を音楽とともに上演する独創的な吟遊詩人、いわゆるラブソードスであったと解せる。さらに彼は天才でもあり、彼が方々で繰り出す技は人々を熱狂に誘い、彼らの情欲をも刺激した。これはまるで磁石が摩訶不思議な力で鉄を引き寄せるかのような情景ではあるまいか、そうエウリピデスが感じていたとすればどうか。文学的かつ心理的に、彼は「マグネスの石」を選択する十分な理由を有していたと、磁石の未解明の語源はエウリピデスの琴線に触れたスミュルナのマグネスであると私たちは結論付けることができる。

⁸⁶ Cf. *FGrHist*, 3.3.2, 765, T5; Pearson, op.cit., p. 109.

最後に本稿の着想の出所を明かし、上記結論が巨人の肩に乗って前方を眺めることで不意に得られたものであることを記しておきたい。巨人とは言うまでもなく M・L・ウェストである。すでに言及されたように、彼の論文「スミュルナのマグネス」は 2011 年の自選論集第 1 巻に掲載された⁸⁷⁾。ウェストはその後、2012 年に第 2 巻⁸⁸⁾を、2013 年に第 3 巻⁸⁹⁾と『叙事詩環』⁹⁰⁾を、そして 2014 年には『オデュッセイアの成立』⁹¹⁾を刊行した。これが彼の生前の最後に刊行された単著となった。彼は次なる課題として『オデュッセイア』の新たな校訂版の作成へと向かったが、2015 年 7 月 13 日に死去した。彼はラテン語の序の末尾に「2015 年 6 月 21 日」の日付を添えているので、一とおり原稿を仕上げ、推敲に着手して間もない時期の、本人も予期せぬ往生であったと思われる。この書⁹²⁾は彼の遺志を継いだ妻のステファニー・ウェストと複数の研究者の助力によって完成され、2017 年に出版された。ウェストによる『イリアス』の 2 巻本の校訂版⁹³⁾は 1998 年と 2000 年に刊行されており、晩年の彼は『オデュッセイア』の校訂を含め、ホメロス叙事詩および関連テーマの研究に持てる力をすべて注いでいた。そんな彼にとって、磁石の語源のような問いは関心の範囲外にあり、それを掘り下げることに面白みを感じなかったのであろう。アテナイの悲劇詩人の中で彼がとりわけ深い関心を寄せたのはアイスキュロスであり、エウリピデスではなかったことも関係があるかもしれない。実際、上記の論文に磁石やマグネットに関するコメントは一つもない。しかし、磁石の語源やエウリピデスの用例に関心を持ちつつ、ウェストの論文を読めば、スミュルナのマグネスがイダの牧人マグネスに代わるキーパーソンであることが即座にわかる。いったん気づいてしまえば、この着

想はいたって簡素なものであることが判明する。簡素な着想が長年にわたって誰にも気づかれなかったのは、スミュルナのマグネスが「ほとんど忘却されていた (practically forgotten)」からである。この忘却状態にピリオドを打ったのはほかでもないウェストである。筆者が気づかなくとも、いずれウェストの論文を通じて別の誰かが気づいたであろう。その意味で、本稿は巨人のごときウェストの歩みが可能にしたものなのである。

すでに彼はハデスに下ったけれども、シシュフォスの前進を定めとする学徒の一人として、ウェストが等閑視している点を指摘しておきたい。それはマグネスの名である。ウェスト自身も認めているように、マグネスは当時のギリシャ人の一般的な個人名ではなかった⁹⁴⁾。むしろそれは部族や集団としてのマグネテス人の単数形である。実際、引用の記述にはマグネスと関係を持ったマグネテスの女たちと彼を迫害したマグネテスの男たちが登場する。マグネスとマグネテスの名の対応は明らかであり (ルクレティウスのラテン語詩の Magnes と Magnetes の対応と同様に)、これはマグネスなる詩人がマグネテス人の一人であること、つまり、彼の本名はマグネス以外にあることを示唆する。かりに彼の本名がマグネスでないとするれば、彼はいったい何者なのであろうか⁹⁵⁾。

略号

DM : William Gilbert, *De magnete, magneticisque corporibus, et de magno magnete tellure : physiologia nova, plurimis & argumentis, & experimentis demonstrata* (London, 1600).

FGrHist : F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker*, 3 vols. (Berlin, 1923-1958).

LCL : Loeb Classical Library.

LSJ : *A Greek-English Lexicon*, ed. H.G. Liddell, R. Scott and H.S. Jones, 9th ed. (Oxford, 1996).

87) 同様に、ウェストはギリシャ文学の研究と並行して進めた印欧文学研究の成果として、『アヴェスタ』のモノグラフを刊行している。Martin L. West, *Old Avestan Syntax and Stylistics: With an Edition of the Texts* (Berlin/Boston, 2011). その前年には『アヴェスタ』の「ガーター」の英訳を刊行している。M.L. West, *The Hymns of Zoroaster: A New Translation of the Most Sacred Texts of Iran* (London/New York, 2010).

88) *Hellenica: Selected Papers on Greek literature and Thought*, vol. 2: *Lyric and Drama* (Oxford, 2012).

89) *Hellenica: Selected Papers on Greek literature and Thought*, vol. 3: *Philosophy, Music and Metre, Literary Byways, Varia* (Oxford, 2013).

90) *The Epic Cycle: A Commentary on the Lost Troy Epics* (Oxford, 2013).

91) *The Making of the Odyssey*.

92) Homerus, *Odyssea, recensuit et testimonia conguessit* Martin L. West (Berlin/Boston, 2017).

93) Homeri *Ilias, recensuit, testimonia conguessit* Martin L. West, 2 vols. (Berlin/Boston, 1998-2000).

94) West, "Magnes", p. 347.

New Pauly : Brill's New Pauly: Encyclopaedia of the Ancient World. Antiquity, ed. H. Cancik and H. Schneider, English ed., 15 vols. (Leiden/Boston, 2002-2010).

RE : Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft, ed. A.F. von Pauly and G. Wissowa, 24 vols. (Stuttgart, 1893-1963).

謝辞

本稿は2019年度後期、勤務する大学から筆者に認められたサバティカル研修の成果の一部である。執筆には2020年夏の2か月を当てた。サバティカルの期間は、世界有数の磁場とも言うべき東京に滞在し、複数の問題を同時に考察できた点で、また、15年近く考え続けてきたホメロスと彼の叙事詩をめぐる問題について個人的なブレイクスルーを得られた点で、非常に有益であった。当初論文の形にしようと考えていたテーマは「いわゆるホメロス問題とM・L・ウェストの貢献——『イリアス』の真の作者について——」であったが、結果的に、磁石の語源を問う論考が先に仕上がった。一見すれば明らかなように、本稿は磁石語源論を糸口とするホメロス論の企てである。客員研究員として快く受け入れてくださった上智大学中世思想研究所所長の佐藤直子先生、10余年にわたって研究活動の便宜を図ってくださっている早稲田大学文学学術院教授の森原隆先生、静岡県立大学の関係者各位に心より感謝申し上げます。早稲田大学高等研究所の皆様、とくに長年お世話になっている事務局の柏屋治伸さん、有意義なコメントをお寄せいただいた2人の匿名の査読者、三美印刷の渡辺のみ子さんにも厚く御礼申し上げます。

95) マグネテス人 (Μάγνητες) はプラトンの最晩年の作で、ソクラテスの登場しない長篇『法律』でも言及されている (848D, etc)。この作では、プラトン自身と思しきアテナイからの客人、クレタ人クレイニ阿斯、ラケダイモン人メギロスの3人が、クレタでの新規の植民計画に関連して、理想の国制および法律をテーマに議論を繰り広げる (ただし話の大半はアテナイ人の語りである)。クレタの住人らの計画は、集団移住により無人の地となっていたマグネテス人のポリスの再建を意図するもので、入植者は新たなマグネテス人になることが想定されている。これまで多くの研究者が様々な角度から『法律』を論じてきたはずであるが、おそらく誰一人明確に説明できていないのは、なぜ、現実にはクレタ島に存在したかどうか定かではない、マグネテス人のポリスが植民予定地として設定されているのか、プラトンはそうした架空の設定を通じて具体的に何を意図しているのか、という問題である。あえて私見を示せば、ここでも解答のカギは、スミュルナのマグネスの文学的影響である。プラトンもエウリピデスと同様、クサントスの『リュディア誌』を読み、不可思議な詩人のエピソードから何かしらの刺激や示唆を受けていたのではなかろうか。